

八十一難經小解 二

自二十三難  
到三十四難  
共六

十武  
358  
2





八十一難經小解

廿三難曰。手足三陰三陽。脉之度數可曉以不。以ハ助語ナリ。與乎ノ意アリ。

人身精神氣ノ三ツ。水穀ノ氣ト和シテ

營衛トナリ。内ヨリシテ外ニヨリシテ内

表裡上下。陰ヨリハ陰ニヨリ。陰相通ニ

相交リ。相奪シ。水ノ條理アリ。表ノ文理アリ

ルカ如ク。其血氣シ相灌注ス。元素一脈ノ

流注ナリトイハレ。ハ入り一ハ出。一ハ下リ一ハ升

リ一ハ降リ。肺ニ入テ肺ニ出ルトキハ肺經

立テ

本十八直度  
穴道新道ハ  
セテ曲ルコト方

ト心ニ出テ心ニ入ルヲ心徑トシ肝脾腎腸  
胃ノノノ其出入ニ從テ其流注ノ勢ニ曲直  
廣狹多寡長短上下歸疾氣多血少氣少血  
多氣血多氣血少ノ區別アリ故平ニ徑ノ區  
別ルモノナリ。元來一脈周流ナリトイヘトモ流  
注ノ勢ニ各異アルヨリ。治スルニ至テ亦各  
異ナリ。實ニ群略相ナリ。巨細寒ク率凡  
モ也。彼委端ノ徒十二經ヲ攝シテ一脈ニ以テ  
呼モナリ。假令江城ノ市街ニ以テ。各ノノ  
名稱ヲ攝却シテ一江タル各トスルニ同也。

金華堂

八指トトシテ其脈脈ノ後ニ流ニテ多ク寸ノ  
陰ニ生滯シ極枯ルモノアリ。今此經ハ脈脈  
ニ度數アリテ其自然ノ勢ヲ天ヨリノ出ル  
向難ス。寔ニ天ニ度アリノ地ニ里數アリノ力  
物ヲ教ラシテ立ツコトナリ。

然手ニ陽之脈從手至腕長五尺五六合  
三丈。

手ノ三陽トハ手太陽心腸手陽明手少陰  
ナリ。ニテ指ノ澤ヲ弁シテ升リニノ所ニ至ル  
太陰ハ指ノ澤ヲ弁シテ頭ノ聽官ニ

意

至り。次明ハ次指ノ高次ヨリ。髀テ頭ノ面  
香ニ至リ。又次ハ每名ノ南衛ニ起テ頭ノ  
絲竹ノ空ニ至ル。ニナ手ヨリ頭ニ至ル。足ノ  
三次ハ頭ヨリ足ニ至ル。其然ル所以ヲ解モ  
ノナシ。是ニ愚考ヲ以テ學者ニ向フ。手ハ  
次ナリ。足ハ陰ナリ。手ノ三次ハ次ハ隻ノ  
次ナリ。隻ハ次ハ衛ヲ以テ長ニ盛ニ。髀生部  
長ス。故ニ其勢亦ルモナリ。足ノ三次ハ秋  
次ナリ。秋ハ次ハ衛ヲ以テ收斂ノ為ス。故ニ  
降ルモナリ。シカモ手ノ三次ハ春ノ玉用

ヨリ。髀生部長シテ衛ヲ以テ盛大ニナリ。隻  
ノ玉用ニ於ル。故ニ其長テ五尺トス。五八土ノ生  
数ニシテ隻ハ土ノ生数ニ生シテ土ノ  
生数ニ終ル。五ニ五尺ヲ以テ流注起止ス。此經ノ  
此降ト摩數ノ尺量何ニヨル事ヲ知ルモノ  
ナシ。學者未嘗知ルハアムカラス。左右合シテ  
五六合ニ人ヲ得ル也。  
手ノ三陰之脈。從手至胸中。長ニ人ヲ得。三六一  
丈八尺五。六三。尺。  
手ノ三陰トハ手太陰肺、手厥陰心主、手少

膻心ナリ、二十胸中ヨリ、発シテ降テ手ニ  
至ル大陰ハ中府、少府ヨリ起テ大指端、少商  
ニ出ス、又陰ハ心中ヨリ、発リテ<sup>手</sup>少衝ノ支衝内  
廉ニ出ス、厥陰ハ胆中ニ起リ、手ノ中指、中衝  
ニ出ス、二十胸中ヨリ、出テ手ニ出テ手ヨリ  
復テ升テ胸中ニ決ル、大脉ハ起ル所ノ中府ニ  
終リ、又脉ハ胸中ノ極泉ニ終リ、手ノ厥陰ハ  
胸中ノ天地ニ至ル、手ハ少冲ナリ、手ノ  
三陰ノ陰、春陰ナリ、春ノ陰ハ漸ク以テ衰  
一退クナリ、故ニ退キ收ル、天地ト俱ニ降リテ地ニ

金華堂

帰ス、故ニ胸ヨリ、出テ降ルナリ、レカモ春ノ  
陰氣ハ冬ノ土用ニ培リテ、春ノ土用ニ收退ス  
春ハ木也、木ノ生數ハ三十ナリ、土用ハ五ナリ、  
故ニ三五ノ數ヲ以テ、三八ノ數ヲ得テ流注起  
止ス、左右合シテ三六一丈八尺、右合シテ  
五六一丈八尺ナリ也、  
足ニ三陽之脉、後足ニ至氣、長八尺六分八厘、八尺  
足ニ三陰ハ足少阴、男足ニ又少胆、足大少膀胱ナリ、  
ミナ内注、即而ナリ、シテ足ニ至ル、足少阴ハ鼻  
ノ交頰中ニ起リテ、足少指ノ厲兌ニ出ス、足

カ

又次八目ノ銳背ニ起リ、足ノ少指ノ竅陰ニ出  
 足ノ次八目ノ内背ニ起リ、少指ノ至陰ニ出、  
 是實ハ次ヨリ、足ニ至ル也、其後還注ルモ、  
 次明ハ厲兌ヨリ、出テ次ノ次維ニ加リ、又次ハ  
 竅陰ニ出テ次ノ腫子髀ニ還ル、太次ハ至陰ニ  
 出テ次ノ晴明ニカレ、故中文從足至次ト云  
 ナリ、足ノ三次、次ハ足ハ本陰動ナリ、三猶  
 秋ノ陽ナリ、秋次ハ漸ク以テ衰退、故ニ上  
 ヲリ、シテ降ルモ也、其次、少指ノ至陰ニ出、  
 土用ニ昂ス、故ニ八ハ易ノ土數ナリ、五土數

八初生ノ土數ナリ、十八老成ノ土數ナリ、今  
 人身偶ノ極數ナリ、三ニ奉シテ、易ノ土數ニ奉  
 ルナリ、是、医易一意ナリ、所也、其純土ノ數ヲ  
 得ルヲ以テ、八尺ヲ得テ、流注起止ルモ也、故ニ  
 左右合シテ、六八四丈八尺ヲ得ル也、  
 足ニ陰ニ脈、從足至胸、長六尺五寸、六ハ三丈  
 六尺、五ハ三丈八尺、合シテ、九丈九尺、  
 足ニ三陰ハ、大陰、脾、厥陰、肝、之陰、腎ナリ、其大  
 陰ハ、大指ノ隱白ヨリ、出テ胸中ノ太極ニ至リ、  
 少陰ハ、足心ノ湧泉ヨリ、出テ胸中ノ俞府ニ

至儿脉脉大抵天鼓ニ出テ胸中期つニ至  
儿故ニ本文ニ位足至胸ト云ナリ人足ノ三脉ノ脉ハ  
猶冬ノ脉ナリ人ノ脉ハ漸ク以テ盛ニ收養ス  
盛ナル者ハ進ム故ニ下ヨリシテ胸中ニ并ル也  
其陰ハ秋ノ土用ニ始テ漸ク盛キワナリ人冬ノ  
土用ニ帰ス冬ノ水旺シテ女數ニナリ人土  
ハ中位ニシテ其數五ナリ人故ニ六五ノ數ヲ得  
テ流注起止ノ處六尺五寸ヲ得ル也左右  
合シテ六寸ニ至夫ハ八寸六分三厘合ニ寸九分  
ノ數ヲ得ル也

土

兩足着脉後足至目長七尺五寸二七一寸四  
尺二五二尺合一寸五尺  
伏蹻本足太伏割脉甲脉ニ充ルナリ  
陰蹻ハ太皇又脉ノ別脉然谷ニ充ル也俱ニ  
水ノ氣ヲ主トス故ニ行ニモ人ハ火中ノ土氣  
ノ勢ヲ得テ上行セサレハ毒シテ流レズ七八火ノ  
老成ノ數ナリ人五八五ノ初生ノ數ナリヲ其  
流注七五ノ數ヲ以テ七八五寸左右合シテ二  
七一丈四尺二五二尺合一寸五尺ヲ得ルナリ男  
ハ其伏蹻ヲ以テ數ニシテ八其陰蹻ヲ以テ數

也

督脉任脉皆長四尺五寸二四八尺二五一尺  
合九尺

督脉八行行于法陰之脉之都督入  
任脉八前腹之行于法陰之脉之任育久其都  
督任育八秋金之固下中土之色也ニアラシ  
ハ其功之為コトヲ純ニ二四八金ノ初生ノ數ニ  
シテ其中ニ土氣ノ五數ヲ合シテ四尺五寸ヲ以テ  
流注起止ヲナス前後二四八尺二寸一尺合九  
尺ノ夫數ヲ得ル也

凡脉長一十六丈二尺此所謂十二經脉長總  
之數也

四支ヲ下トス頭胸ヲ上下トス其數ニテ天  
ニ出テ都テ合之トキハ一十六丈二尺ヲ得  
以之五十五度營周スレハ八百十丈ヲ得テ九  
ノ積數ヲ具ス經ノ十二ハ十二月ナリ其  
流注ハ四時ノ陰陽ヲ辨テ四季ノ土用ヲ以テ  
變化シメテ循環ニ合ス其中ニ穴所三百六十五  
ヲ以テ周天ノ度ニ合ス聖人推テ法  
ヲ立ツル者也此寸尺ノ法頭ヨリ足ニ至テ



身長八尺下為之法ナリ假令三足ハ微  
軀ト重モ亦尚八尺ヲ以テ計ルハ古制八寸  
ヲ以テ一尺トス十之ニシテ一丈ヲ夫ノ事ト  
スハヲ尺トスルハ大指ト小指ト相乘ルノ  
際ヨリ八字ニ似タルヲ尺トスルヨリヲ以テ  
經脈十二絡脈十五何始何終也  
經脈十二トハ手足三陰三陽ノ經ヲ并ス絡脈  
十五トハ十二經ノ絡脈ニ陰經ノ絡ト陽經ノ大經  
トヲ并テ十五トナル都テ二十七脈ナルモ其  
經脈ノ流注何レニ始リテ何レニ終ルノ始ル

所ト終リ窮ル所ヲ向ナリ

然經脈者行血氣通陰陽以榮於身者

也  
人生ルハ先精ヲ生シ精ヨリノ氣ヲ生シ氣ヨ  
リノ神ヲ生シ神血水穀ノ氣ヲ兼テ血氣ノ  
通行ヲナス其通リスルノ隧道ヲサシテ經  
脈トイフ其經脈ノ流注テ藏ノ血氣ヲ府ニ  
通シ府ノ血氣ヲ藏ニ通シ手ヨリノ足  
足ヨリノ手表ト裡ト頭胸ト手足ト  
背ト腹ト上下ト陰ト陽ト巨細通セカ

所ナシ草木ノ分理ニ氣津ヲ運ハシテ榮  
養スルニ又トウノ分理ハ經脈ナリノ氣津  
ハ血氣ナリノ三陰三陽相通ハズシテ陰陽  
不通トコロナシ故ニ行血氣通陰陽以榮  
於身トイフナリ

其始從中焦注手太陰陽明ハ注足少明  
太陰

蓋シ經脈ハ精ニ本キ氣ニ中コロシ神ニ子  
ノ水穀ニ成ルモノナリ故ニ腎間ノ動氣ヲ本  
トス是レ此氣ハ精中ニ寓ル氣ト神トニシ

表  
手

テ先天ニ稟ル所ナリ之ニ始終スル所ナシ  
其某処ニ起リノ某処ニ止トイフハ後天中  
焦ノ穀氣誘引シテ先天ノ氣ト和シテ行モ  
ノ也是後天ノ穀氣ヨリテ日々新ニ生シ其  
始中焦ニ起テ肺ハ諸氣ノ上ニ在テ身形ノ  
上皮毛ノ氣ヲ總一テ一身ノ至高ニアツカレ氣  
ハ三ナコトニ屬ス故ニ手ノ内ノ上ニ屬ヲ以テ此  
肺氣通透ノ地トナヌハ手少陰ハ大腸ノ  
位ト宜ルモノハ大腸ハ其位肺ト遠トイハレ  
其氣化ハ肺ト一ニシテ面赤ニ在テ秋ノ位

降故  
二九

尤至尊故三手外ノ上廉ヲ主ツテ流注  
シテ也手陰ハ春ノ陰ナリ以テ陰ヲ先  
トシ秋ヲ後トス太陰ハ明ノル也且ノ陰冬  
ノ陰ナリ以テ秋ノ陰ノ降ヲ以テ先ト  
シテ陰ヲ後トス故ニ秋ノ陰ノ降ヲ以テ先ト  
トノ上ニアリテ諸藏ノ中ニ在テ中焦肌肉氣  
ヲ總ニ一身ノ中部ニテカニ氣ト諸花運布  
スル氣ハミチコトニ爲ス故ニ豆ノ内ノ上ニ廉  
以テ此降氣通透ノ地ト云ハ且ノ秋明ハ男ノ  
性ト云ル也男ハ其位降ト相通シテ其

氣化尤一ニ出前腹ヲ主ツテ秋ノ位尤之故  
ニ豆ノ外ノ上ニ廉ヲ以テ此胃氣通透ノ地ト定  
ム上ニシテ肺大腸ノ大陰秋明トナリ下ニシテ  
胃脾ノ秋明大陰トナリ上下異ナリトイ  
ハ其氣化一ニ出ツ故ニ岐伯モ上下法ヲ同ト  
ハ云ヤ傷ヲ云ヒ豆ノ傳テ手ニ之傳トトハ皆不  
知ナリ仲景ノ大陰ハ肺脾ヲ不ク秋明モ亦  
胃腸ト不クモ也  
大陰注手少陰太陰ハ注足太陰少陰  
心ハ肺ノ下ニ位ス其外ニ心包ノ氣アリ心包

ノ氣ヲ以心ヲ包含ス俱ニ肺ノ氣中ニ流テ  
光明通達上部ニシテ深ク位ス血脉ノ化ヲ  
主ツテ君主トス肺ハ天如ク心ハ日如  
ク如シ天氣トイヒ日如クテ光也カレハ  
肺氣内ニ安置スルヲ以テ肺ノモ脾上ニ  
在リ故手内ノ下廉ヲ以テ此心氣通リノ  
地ト云ハ蓋シ坎ハ進マ道トシ陰ハ退シ宗  
トス進トキハ數ヲシ退トキハ數又シ大陰ヲ  
三陰トシ少陰ヲ二陰トシ厥陰ハ一陰トス坎ハ  
多坎之坎トシ坎明ニ坎大坎ハ三坎ナリ手

金華堂

大坎ヲ小腸ト定ルモ人其位心ト遠トイヒ  
其氣化ハ心トシテ項背ノ後ニ在テ坎ノ位尤  
モ多シ故ニ手ノ外ノ下廉ニ流注ス是陰ハ内  
スルヲ優シリトシ坎ハ外ニ出ルヲ優シリトスル  
ユナリノ手ノ陰ハ春ニ應シテ下降ス故ニ先  
トシテ坎ヲ後トス且ニ坎ハ冬ニ應シテ升ル  
故ニ坎ヲ先ニシテ坎ヲ後ニス又骨ハ少陰ニシテ  
脾肝ノ下ニ在テ身中ノ骨髓ヲ主ツテ諸骨  
ノ根基タリ一身ノ至下ニ在ル氣ハ皆コハ  
ニ屬ス脾内ニ居テ脾ハ土如ク腎ハ水ノ

不勝ノ  
手ノ外ノ  
下廉ニ  
流注ス  
是陰ハ  
内スル  
ヲ優シ  
リトシ  
坎ハ外  
ニ出ル  
ヲ優シ  
リトス  
ル

足ノ徑ハ  
長キニ  
足ヲ云テ  
手コモル  
トイフモ  
不知也

如シ地氣トイハ水ヲ以テ中ニ浮係不土内ニ  
在リ以テ足ノ心ノ下廉ヲ以テ其腎氣ノ通  
行ノ地ト云ハ膀胱ハ其位腎ノ相通シテ其  
氣化尤一ニ出フ背後ヲ抱テ又地最モ廣シ  
故ニ足ノ外ノ下廉ヲ以テ此膀胱ノ氣通リ地  
ト云ハ上ニシテ心ノ膈ノ外太陰トナリ下ニ  
シテ腎膀胱ノ太陰ヲ陰トナリ三ノ上下位ヲ  
異トシ一尺寸氣化一ニ出フ故ニ仲系ハ太陰トイ  
フトキハ心腎ヲ抱括シ太陰ト云トキハ心膈膀胱  
腕ヲ不區別ナリ

少陰注手心主少陽ノ注足少陽厥陰  
心包ハ厥陰ニシテ心主ナリ名ト氣脈ナリ  
テ形ナシ形ナシトイハ其氣脈心神ヲ包容  
ス身形ノ血脈ヲ抱一テ肺ニ出得ニ生ルノ氣化  
此ニ主ル故ニ胆中ヲ氣化ト名テ人身中極ノ所也  
肺脾トイトモ此心主ニヨリテ其運行ヲ達ル也  
故ニ肺心ト云ハ其氣脈ヲ通シテ手ノ  
内ノ肺心トノ二極ニ中シテ通行ヲナスナリ  
手ノ少陰ハ三焦ニシテ名ト氣脈トアリテ形  
ナシ形ナシトイハ其氣化ハ心膈ト太陰

トノ清化多事ヲ此ニ主ル故ニ元氣別使ト  
ス此氣十午シハ腸胃ニ十ノ空位ナリ故ニ  
伏明ノ大腸太陰ノ大腸ト西伏ノ南ニ伏  
行シテ大陰トス故ニ太陰ハ後ノ伏明ハ面ニ  
シテ大陰ハ胎側ニ其行經ノ地トス伏ハ進マ  
テ極トス太陰ハ多クシテ浮ニ伏明ハ多クシテ  
中ニ大陰ハ側ニシテ深ク又肝ハ腎脈ニシテ  
履陰ハ厚ク多クナリ人其藏スル脾ノ下腎  
ノ上ニ位シテ脾ニ運シ藏ルモノヨリニ其樞機  
ヲ主ル故脾經ノ下腎經ノ上ニ於テ其經ヲ

通行ス故ニ肝為ニヨワテ乘シテ脾虛ヲ  
ナスアリ肝為ニヨワテ水ヲ吸合シテ腎  
虛スルアリ脾為腎為人ニシテ其木色  
木形アリ人ハ宜ク春ノ考ス一キ所ナリ又  
肝虛スレハ脾ニ升又肝虛レハ腎火キユルニ  
似タリ東垣益氣湯ヲ劑ルニ柴胡ヲ加ル  
類ヲ見ルニ是ノ大陰ハ胆ナリ胆ハ其位肝  
ト相同シテ氣化尤モ一歩ノ胎側股ヲ總シテ  
其地狭ニ故ニ伏明ノ胃ト大陰ノ膀胱ト其間  
ニ其經脈ヲ通ナリシテ西伏ノ樞機ヲス胃

ノ穀ヲ入レ、膀胱ノ津液ヲ主ルニ、此胆氣ノ  
虚実ニヨリテ、後急ヲ十ノ可見、厥陰ハ心主  
ト肝ト其氣化ヲ同シ、必臥ハ三焦ト胆ト其氣  
化ヲ同ス、仲景ノ上下ヲ不分ト、素難ノ別之  
モノトトモニ、詳略相由リ、巨細悉ク奉ル  
モノ也。

厥陰復還注手太陰

中焦ヨリ、肺ニ始リ、厥陰ノ肝ニ接シテ、足跗ノ  
上廉ニ循リ、内踝八寸ニ上テ、膈ノ内廉、曲泉ニ  
復股ヲメグリ、陰毛際ヨリ、氣街ニ會シテ

季脇ニ上リ、脇肋ニ布キ、肺泡ノ中府ニ會ス、  
又肺脈ト同ク、氣口ニ出、終焉復始ノ端  
偕ヲ知ル、カラズ、大衍五十ノ數ヲ合テ、其  
常度ヲ定ルノ也。

別格十五皆因、其意如環、無端轉相灌漑、於  
於寸口人迎、以處百病、而決死生也。

前文十二經流ノミヲ奉テ、任督ノ行ヲ不  
説ク、此ニ別格ノ十五モ亦此十二經ノ流  
注ニ從テ外ナラズ、ルナリ、皆ト八十二  
經十五格ヲサス、因、其意トハ、根原也、根原

トハ先天稜中ニ包ム所ノ氣ト神トナリハ  
難ニ三焦ノ原十二經ノ根ト指所モノヲイフ  
此意ニヨリテ行トキハ脉隊相貫通シテ其  
絡脈脈系ニ係ルトイハ其根中ハ其意ニ  
ヨリテ五十營八百十丈ニ為リテ相貫テ如  
環無結結お灌既ニ脉隊寸口ニ人迎ニ於ス  
ニニ大過不及ノ偏ナシ於トハ潮ナリハ氣血  
呼吸ニ從テ水滌ノ為ニ應カ如クイフハ其氣  
口ト人迎ヲ取テ以テ脉隊ノ相貫カ不貫カヲ  
考テ百病ヲ處シテ死ト生ヲ決ス三十

經絡ノ通塞ヲ診ルニ在ルナリ難經ハ楊十  
二經ヲ以テ寸口診法ヲ立ツ故ニ氣口ヲ重トシ  
未人迎ヲ之ニ從ナリ且人迎モ亦此百病ヲ處  
シテ死生ヲの交ノ要處タルコトヲ示ス  
其絡脈ノ傷ニシテ戰國相竅意ルルル  
十九ヲ以テ本文ニ始ニ其後ヲ以テ載ナリ西  
晉ニ至リテ王叔和寸脉左右ヲ以テ人  
迎氣口ヲ立ツ又取所アリトシカニ外邪ト  
内傷ヲ分ノニ脉隊ヲイハレ也  
經云明知終始陰陽決定至何病也



上文寸口人迎處百病死生也イフニ  
本テ此言ヲ引テ經ハ靈樞ノ所論毎ナリ  
其言ニ曰明知終始者死生之紀也  
ト是ナリ終トハ生也窮リニシテ死ヲ  
イフ始ハ生也始ニシテ生ヲイフ其生ト死ト  
ノ辨者三陰三陽之脈ニ於テ定紀アリ人迎ノ  
一盛二盛三盛一少二少三少其詳十九コトシ向  
フ三十三陰三陽ニ於テ相通ヲ相絶ル  
ル者之ナリ人  
然終始者脈之紀也

其終始トイフ者ハ死生ノ義ニシテ終始ニ  
於テ人迎氣口トイフノ紀綱アリテア  
ルトハ義ハナリ人  
寸口人迎陰陽ノ氣通於朝使也環無始  
故曰始也  
寸口ハ五藏ノ三陰ヲ候ノ所人迎ハ六府ノ  
三陽ヲ候フ所人身陰陽ハ手足ノ三陰  
三陽ニシテトモニ寸口ト人迎トハ經庭ノ如ニ  
シテ二十五ノ者ヲニ朝使ヲ通シテ其氣偏  
權ナキヲニ三陰三陽ノ日ノ通シ今九ナリ

偏勝テ

故ニ環ニ至ルカ如クナルニ始トイフ也成ニ衰見  
一ナリナリ  
終者三陰三陽之脈絶列死各右形也  
人身陰沈日衰カ難クテ樞機止トキハ三陰  
三沈ノ脈二十カラノ勢使ラ通コト不能ナリ  
朝使ヲ通トキハ樞機沈伏勝負アリニ其病  
陰沈ト陽絶ルニ至ル至ルニ至ラ死トイフ  
人迎四倍或ハ氣口四倍ス其身死ニシノ形  
状ヲ見ワス是則チ人ノ死ナリ此等ニ絶  
脈ノ衰ハ心ニシテ病ニ下ルニ脈ノ絶リ

一陰ニ陰ニ至ル  
一沈ニ沈ニ至ル  
一沈ニ沈ニ至ル  
一沈ニ沈ニ至ル  
一沈ニ沈ニ至ル  
一沈ニ沈ニ至ル  
一沈ニ沈ニ至ル  
一沈ニ沈ニ至ル  
一沈ニ沈ニ至ル  
一沈ニ沈ニ至ル

説ク也寸口人迎ヲ受テ看セシメ

廿四難曰手足三陰三陽氣之絶

絶ハ陽絶ナリ陰絶ハ陽絶ナル義ナリ  
假令ハ脉絶ニ病成トシバ寸口ノ脈部カ  
人迎ニ三倍シ脉部カ虚トバ氣口カ又テ人  
迎ヨリノ少ナリ其盛衰四倍以上ニナリ  
何ニテモ氣已絶トイフテ脉伏お通カ  
ルナリ

何以為候可知其吉凶不  
脉之候了人三陰三陽ノ陽絶人

迎氣口ノ脈上ニ見ルコトハ其候證ナ  
キトキハ其吉凶ヲ定メカク故ニ前公論ニ  
次テ其候ヲ諦ス人ノ生ハ經脈ヲ貫唯  
一元混合シ善行テ輻輳ナシ其死ルヤ脈  
狀相雜テ各形ノ跡アリ

然是ガ陰氣絶シハ即チ枯

コトヲ陰タケルハ枯死ニ其本腎間ニ存テ  
其氣ニヨリテ脈狀ハ變テス其氣ニハナキ  
ハ脈狀偏危ス捷シハ常ヨリ肝ノヨリ傳導ニ  
通ルコトヲ絶シテ是ガ脈ノ脈寸口ニ於テ

ハナルニシテ人迎ヨリ反テ四倍トナル也是ヲ是  
少陰氣絶トイフ其絶ル脈アリハ即チ骨枯トイフ  
ノ兆アラワルヤ也骨枯トイフハ達長ニ枯後ニ  
固クシテ寸チ骨ヲ枯ラシムナリ然レバ  
志達セテ枯後氣固クモノモ未入通ノ脈  
ヲ休ニ成テナラシハ絶トセズ

乃陰氣ノ孤也伏行而留骨髓故身熱ニ是  
即チ死ノ者也凡ソ骨ノ氣固クテ死ニ至  
ニ却チ枯セテ枯後氣固クモノモ未入通ノ脈  
死成日言ハ日死

又陰ノ骨ノ脉ニシテ其流シ深ク依リシテ骨  
 髓ヲ温固ス温クテ其活ホニシテ烟ノ生ル  
 水ナル故ニ蒸リ今腎脉ノ下キハ腎男ノ  
 ノ下キハ下キテ人血盛ニ腎陰依リルキトニ  
 能クシテ倍固甚ホソク故ニ骨髓之温ク肉ハ土  
 ノ化沈以成ナル之土水急ニ舞皆テ其親  
 即沈以成其火極スヤワウカニシテ却クハ  
 筋結スリ故腎水カシテ其流長ニシテ枯  
 枯スルナリハ沈以成土亢リテ上ニテハ腎  
 深ク下ニカシテ之候固ルナシハ其骨ノ

真水カシテ沈明ノ土火カワユシ成日ニ驚シテ  
 巳ノ脾土ノ陰勝ノ日ニ其克ヲウルユシ死ス  
 是太陰言其利孤ノ言也

子ニ豆ノ太陰トイフハ其脈同ニ本テ太  
 陰ノ水氣初ルニテハ沈以成通クニ  
 初ルニ其急ユルニトキハ是ノ太陰脈ナリ  
 ニ於テハコレテ人運血倍々トテ倍ナリ是  
 ノ是太陰言其利孤ノ言也  
 只其言ノ其脈ノ言也  
 骨ノ互也其言トイフヲ以テ通知ナリ

○以下本文也

化

カレ氏病の心唇反トイ氏其大肺ノ筋隔絶  
十キ者ハ未又死トセ名曰唇反肌肉之本  
也筋之管ハ肌肉ノ管ハ肌肉之増減ハ別  
肉結ハ別唇反ハ別肉生死甲日  
管乙日死

太陽ハ脾筋ニシテ甘味ノ中ニシテ肌肉ニ  
充ツ今脾筋ニシテ肝胆少沢木氣アリ  
テ人迎ニ太陽中筋之純ニシテ肌肉厚且ニ  
ニテ木也ヲナシテ骨ノ反脹ハ木ノ化也沢象  
ナルニ木土雜シ皆テ唇肉ヲ動ノ筋厚也

又肉結ノ筋ハ膈肉ノ筋ニシテ急ナルヲイフ  
也故ニ唇反也ニテ鼻台ノ筋ニシテ少沢  
ノ木中筋ニ充リテ脾筋中ニワクルニ  
甲ノ木沢ニ充テるニ乙ノ木陰ヲ以テ  
其克ニ筋也  
且筋之氣絶即 氣絶ハ卵ノ古者  
其唇之充ニシテ足唇所ノ氣以テ少道トキ  
ハ氣口ノ肝筋ニシテ人迎反テ口唇ナ  
ル是ヲ足唇所ノ氣絶トイフ也其唇ノ筋ヲ好  
シハ卵筋縮引卵ノ舌トイフノ舌アラウ凡

ル也其卯古ノ筋急ニ見テ筋ノ端ヲ起  
ヤ君人舌卵筋トイフ人迎四書ニシテ  
少陰言口ニシト足サレハ未タ死トセズ  
厥陰者肝筋也肝去筋ト云也心ノ裏注器  
与活舌本故筋ヲ急別筋筋急トイフ  
引卵也舌故舌急卵筋此筋之死庚日也  
辛日死

厥陰ノ筋ノ筋ニシテ舌筋トヤノ際ニ故ニ肉次  
昔ヨリ浅クシテ筋ニ急ト云フ筋ト云ルトキハ  
筋大筋ノ筋筋急ト云リテ三日口ノ筋筋

二人迎盛ニ厥陰ノ深ク不筋シテ卯古ノ軟  
金化ナシ皮膚筋急ニシテ筋長又千之千  
經トナル也三十婦金ノ筋カ千テ肝ノ陰  
下ニワクル也庚ノ金次ヲ得テ筋急ト云  
金陰ヲ以テサレト云ルナリ  
手太陰筋人迎即皮毛也  
其急石充シテ手太陰ノ筋次ト云通トキ筋  
口ノ筋筋トシテ人迎又テ四倍ト云トキ是ヲ手  
太陰筋トイフ也其筋ノ筋ヲ得ルハ即皮毛  
焦ノ老ヲアツラス也又皮毛焦トイフハ皮枯

毛折トイフヲ以テ知ルナリ若シ人皮枯毛  
折トイフ毛肺脈氣口小ニシテ人運四盛トシ  
アラサシハ未又真絶ニアラス

太陰者肺也行氣最速也氣弗營則皮毛焦  
皮毛焦則津液去津液去即皮膚乾傷則皮  
枯毛折也

太陰ハ肺ノ脈ニシテ其流シ速ム故ニ氣ヲ皮毛  
ニ行ラシ毛竅皮孔ヲ衛リテ内ニアヌカチ  
ム今肺脈絶ニテ氣ヲ營トキハ心ヲ膈太陰  
アメリテ人運盛ニ火氣ノ化ヲキレテ皮毛焦

枯シ白毛クチケ肺脈皮膚ニワタルユ丙ノ  
火ノ秋日ニ為篤シテ丁火ノ脉ヲ得テ其  
克ヲフルナリ

手少陰氣絶則脉不通

手少陰ハ心ノ脉ニシテ其流シ皮毛ニ次テ  
浅シ故ニ血脉ニ充ラ今心脉尽ル上キハ腎  
膀胱太陰ノ水氣アメリテ氣口ノ骨脉ハニ  
シテ人運盛ナルコト四倍ト上ナルコト手少陰  
ノ脉流血脉ニ充レテ脉ヲ通ナリ脉ヲ通  
ナラフハ色以去テ面色蒼如シトイフ也

腎ハクハキ牛ノイロ也。二十水気ノ下ニカケテ  
心ノ血脉上ニツクルナリ。冬ノ腎如老アリト  
イハレ其脈氣口ニシテ人迎四倍已上アラ  
サレハ非ナリ人

脈之通則血亦流、則色反去、故面色黑如蠶  
此血先死、壬日篤、冬日死

血脉之通ハ二十水ノ化カケテ人陰ヲキユ也  
色反去テ水化カケテ二面色黧ノ如シ是心  
ノ血脉先死スユニ水ノ化任ノ白ニ為甚シテ  
水ノ陰ノ多ノ日ニ其克ヲワルナリ人此ニ心主

ノ一脈ヲニテ身モハハ陰絶ナリトキハ心主絶  
ルモ其行既ニ同シテハナリ人

三陰氣俱絶則目眩、若目瞑、一者為失志、  
一者志之死也、即目瞑也

三脉トハ手足ニ三脉ナリ、純釋ノ積氣ハ天ニ  
上テ日月トナリ、地ニ下ハ明珠トナリ人ニアリテ  
ハ上ニ眼目トナリ、下ニ精水トナリ、故目ハ五藏六  
府ノ精神トイフ也、三脉氣俱絶トハ氣口ノ六  
脉ニテ絶シテ人迎四倍ナルヲイフ也、如此ナル  
モハ下ノ積水ヲカケテ五藏ノ積氣ニ



十尺キニ六尺ノ氣ニ至テ相亢極スルニ服陰  
八目有ス目有ルニ至ツテ八神五氣ニ至ル  
ニテ失志スルナリ失志トハ肝ニ志心ニ志脾  
ニ思脾ニ志腎ニ志ノ五志相失乱スルナリ自  
暝ルモノハ必ス失志シ失志ルモノハ必目瞑ス其  
一アルモノハ其二自ラ兼ル也  
六陽氣俱絶者則陰陽相雜陰陽相雜則腹  
理泄絶汗乃出大ニ努殊物出之既即氣モ之死  
且占夕死夕占且死  
六尺ハ手足ノ三尺ナリハ三脈之尺ハ文ヲ互

ニスルノ章法ナリハ六陰三陽トイフモ同シ  
人迎ニ十絶ニテ氣口獨有シイフ也尺ハ上テ  
表ヲ主ル尺氣表ニ絶ルトキハ衛氣傷レテ心  
守五藏ノ絶ニテ神去ルメニアラサレトモ尺氣  
傷ルトキハ陰液着ル所ナシ故ニ膝理世シテ  
絶汗出絶汗ハ多尺ノ汗ナリヲ以テ流ルコト  
ヲ石得シテ肉上ニ着テ珠ヲツル如シイ  
ヨシ出シハイヨシ尺ハナルユ不流ユニ粘  
出テ流トイフ是シ氣先ツ死シテ神後ニ  
死ス三陰ノ絶ハ神先ツ死シテ氣後ニ絶ス

占ハ視兆ナリ、平且ニ世老アルヲ視シハ文  
ニ其状ヲ接ルコトヲ独ニ死ス又ニ其兆  
ヲ見シハ且ニ其陰ヲ接ルコトヲ独ニ死ス  
其難曰有十二經五藏之府十一耳、其一經  
者何等經也

古ヨリ相傳テ十二經ノ名アリ、一、靈樞  
篇ニ其脈居ト云ルトテ、説久故ニ其經路  
ヲイフトキハ皆十二經ヲ以テ名トス、一難已ニ曰  
十二經皆有動脈ト又十八難ニ三部四經ヲ  
説ク三四ス、一テ十二經トス、又身經ノ名称

アリテ其来コト久シ然トシハ五藏六府ト  
イフトキハ各十一藏ノ凡ソ内ニ藏府  
ノ根ナスモノアリテ、外ニ經路ノ枝ニ系ナルモノ  
兼テ必然ノ理アリ、今又、其根ナル藏府  
タ、十一ニシテ、身經系ナル經路十二トナルモ  
ノ、其經元果シテ何ラヤ、藏ニ心脾肝腸  
腎アリテ、五藏トナスコト久シ、府ニ膽胃大腸  
三焦備テ、五藏元ニ論ナシタ、ハ經路ノ論  
ルニ至テハ、手厥心經アリテ、十二ノ數ニ充  
フトシ、凡ソ藏ヲ説クニ至ツテハ、各五六ナイツ也

是し根ナクシテ枝葉ツクんモノ其根陰心也ツク  
七ノ、藏象作用イカナルモノニシテツク寸口ノ脈ヲ  
序列スルヤツク寸口ノ脈象作用ハ又シテ何等  
ノ脈ノヤト問フナリ、學者陰テ心脈アリ、脾脈  
アリ、胃脈アリ、肝脈アリ、腎脈アリ、胆脈三  
焦脈大腸脈膀胱脈アリツク此カナレトモ今更ニ  
ノ脈ハ何ノ脈ノヤト看ルニトナカシ古語脈カニ  
十二經ノ名称アルヲ以テ、手厥陰心主又ルナリハ  
已ニ知トイヘトモ心主ノ多位神用イカナル  
モノニシテ寸口ノ脈ヲ兼ルヤ、其脈ノ多位神用

何等ノ意義ナリト問フト知ルツク  
矣ツク之經者、手少陰心主別脈也

是ハ心カニ手厥陰心主ノ多位神用形體別ニ  
在ルニアルス、又、女性用アルニ、二名位ヲ設ル  
モノナリ、故ニ經路ハ寸口ニ懸ルツクキナラシメテ  
手少陰ノ脈脈ノ別流スル支脈ヲ專用テ  
陰脈ノ流リヲ立タル者ナリ、手厥陰ノ脈脈ノ  
ノ名ニテ稱シテ、手少陰ノ脈トイフモノニ又妨  
ナシ、又手少陰ノ脈名ニ置テ、手厥陰心主ノ脈  
ナリトスルモ亦害ナシ、内ニ専用アルニ

推テ其形ノ分チ設テ十二經水十二月十  
二律十二表十二官ノ區別ヲ備ルモノニシテ  
元來一脈ノ雜合ナリ。若シ多岐配位ノ法  
ニ欠コトアリテハ治ラ施ス至ニ其謀ニ窮  
ル所アリ。靈ノ邪客等ニ諸邪在心  
者皆在心ニ包路ト云言ヲ奉テ比母炎カ心主  
無形トイワバ代心而受邪者在於心ニ包路  
使云有形又云受之何所トイハ厚厚後  
急直結ノ分アルヲ奉テ有形状トイフノ説アリ  
故ニ有形無形ノ論今日ニ至テ不止ナリ

心ハ天ヲ奉ナリ  
日ハ光ヲ照温  
ノ氣ニシテ日  
光ナリ  
腎間ノ元氣ハ  
地ノ神ナリ  
三焦ハ物ニ  
執テ能ル也  
炎ノ火也

古ニモ學者者素靈ヲ讀テ心主ニ疑アルモノ多ク  
以テ越人此向各ヲ設テ切斷シテ手少陰ト心主ト  
別派ナリト云ス是ヲ心主トイフ者ハ心ノ主宰  
相ニシテ心君ノ命令ヲ奉テ宣行スルモノニ  
シテ心ヲ包合シテ氣ヲ以テ心君ヲ守リ其各  
ヲ宣行スルモノナリ。氣ニシテ形ニアルス其氣  
ノアツク心ヲ厚ク守リ膜アリテ心神ヲ包  
絡スル事モ亦然シ然レモ其包合スル氣ヲ  
主トシテ心主トイフ其膜膜ヲ以テ心主ト  
ハ云フカラス。膜膜ハ各一層角皮何ノ主

心主ト

宰シカ是ナリヤ其王トイフ入字ニ見ルニ  
主ハ腫魚ノ功ニシテ宰ヤ敬ヤ掌也  
守也当也又古矣太夫ヲ主ト稱ス天子  
女ヲ公主トイフ周制ニ天子嫁女諸侯ニ  
天子至者不自主婚ヲ止使諸侯同性者主之  
故謂之公主ノ主ナリ又神主トイフ宗廟  
ニ立之テ以テ靈ニ接ル者也一可見ニナカ  
ワフテ奉ル者ナリ一豈憂情ノ脂膜ニシ  
テ何ヲ以テ心ニ代テ主トナラシヤ此位致  
ヲ為ナリテハ六者ト稱ル即千心位

ナルヲ以テ五藏六府ト云今經脈ヲ十二ニ立ル  
トキハ心ノ一脈ヲ別テ竊陰心主トナシテ其根  
ヲ立ルモノ也抑心ノ神ハ氣ニアラス形ニアス  
無聲無臭ナリ氣トイフトキハ跡ノ見ルキ  
アリテ至スルニ水ス其神ノ色含スルノ氣ニ  
以テ心主トスル者也腎間ノ穴モて又レカ  
氣ニアラス形ニアラス動キトイフトキハ  
跡ノ見ルキニアラス其居ルヤ氣ニ奉レテ  
其ノ春ノ氣ハ脊骨間ノ氣ノ命令ヲ奉テ  
宣行スル者アリ其心神ヲ奉テ奉ル氣ヲ

心主トイハ腎間ノ元神ヲ奉テ使令ルヲ云  
フ三焦ト名ク三焦原トイハハ三焦ノ氣ヲ  
てんトトノ原トイフ三焦存トイハハ三焦氣  
ヲ聚ルコト存トイフ三焦務トイフモカク氣  
ノ急慢ニテ緩ヲイハ三焦急トイハハ其急ノ  
搏擊ノコト多クトイフ三焦直トイハハ其氣  
勁直ニシテ直ニ達ルヲイフ三焦治トイフモ  
其氣聚凝ニテ治ヲイフ古クハ是ニ疑ヲ為  
スモノアルコト也雜ニ南示シテ有名無  
形ト改メス三焦ノ氣日夜色羅ニテ止

ンハ氣血ヲ聚テ元府ト云ハ胎膜タル七十  
ニトイフベカラス也ト其一胎膜ハ一層ノ  
胎皮向リ水滲出物ノ積聚ヲナシヤ  
妙多ノ明ニシテ元府ト云色羅スル大囊ノ  
如ナル毒膜ヲサレテ三焦トナスモ人知者ノ  
一失コトラスヤ五津液別滲ニ三焦出之氣  
以區肌肉充皮厚ト是ノ出トイハ氣トイフ  
以テ見ルヤキノ云故三焦ニ於テ一言ニ  
説破ス下文如シ  
心主トイハ三焦ノ表裡俱有名而存形ノ

心主ハ心神人ヲ奉シテ五藏神形ノ用ヲ  
主ルナリハ三焦ハ腎間ノ合ヲ奉シテ六府  
水穀ノ化おラ主ル故ニ心主ハ裡ニシテ陰ナリ  
三焦ハ次ニシテ表ナリハ三焦ハ氣ヲ主テ作用  
運動スルハ心主ハ神機ヲ主ツテ知覺ヲ主ス  
ミナリ氣アリテ名ヲ存ルルニ俱ニ有名ニテ  
形トイフソシタニ無形故ニ刀物ニ應シテ刀  
事ニ接シテ用無窮ナキモノナリハ天地  
ノ間春生シ夏長シ秋收メ冬蔵ス其時  
其時秋名冬ニテ三焦アリテ形ナクシテ

万物ヲ生殺スル身藏府地路又百骸ノハタラ  
キモ子ニシテ形ナキモノニ道テ其職ヲめ  
形ナキニシテイヤシトセバ四時四徳ニテ何ノ  
用ツヤ因テ知ん藏府毎用ハ心主ニ焦ニ總  
シテ割用屠破シテ見んキノ者ニアラズ  
理觀ノ後租ニヨツテ知んキモノナリユト其  
同類ナリテ表裡ナリヤ向日其ニ焦ハ何  
ニヨツテ生シ何ニ在テ何始リ何ニ終ルヤ  
トモニテ生シ何ニ在テ何始リ何ニ終ルヤ  
天地同作ノ一元氣下北水ノ脉中ニ入テ蔵

トキハ腎前ノ動氣トイハ腎前ノ動氣上  
ニ南火ノ秋中ニ明ニシテ心神トイハ心神  
動クトキハ心主トイハ伸テ魂屈テ魄收テ  
志意神機ヲ接ス散テ腎前ノ氣入蔵心  
弁ニテ三焦トイハ取テ府ニ循テ大腸收テ膀胱  
水穀ヲ主ル水穀ノ氣ニ和シテ又一元ヲ養テ  
復心神心トナリテ又三焦トナリテ環ノ端ト  
キカ如シ

故言經有十二也

手少陰ヲ分テ二經トナスニ六經トナリ

位ニテ經ニ有十二ト定ルナリ  
廿六難曰經有十二絡有十五餘三絡者是  
何也絡也

人形ハ草木ニ象ル其面背腹ハ木ノ幹ナリ  
四肢ハ枝ナリ毛髮ハ葉ナリ根ハ蔵ニ在リ  
シテ内ニ藏ル也木幹ノ條理ハ人ノ經ナリ  
枝條ノ木理ハ人ノ絡ナリ梢葉ノ木理ハ  
人ノ絡居ナリ故ニ經ハ縱ニユクノ各ト絡ハ  
横ニ溢テ行トス其經ハ其絡トおる也故  
ハ絡居ヨリテ交存ス木ノ枝葉ヲ折テ根



幹枯ルモ八路ヨリシテ死ニ至ル也  
 人針灸ニ禁ヲ犯シテ死ニ至ルモ八路  
 ヲリ死ニ至ル也  
 凡ハ路ヲ失フニ至ルモ八路ヨリ死ニ至ル也  
 十二路ノ内ニ以テ死ニ至ルモ八路ヨリ死ニ至ル也  
 以テ死スルモ八路ヨリ死ニ至ル也  
 又路ニ至ルモ八路ヨリ死ニ至ル也  
 任智ノ人トシテ死ニ至ルモ八路ヨリ死ニ至ル也  
 外ニ至ルモ八路ヨリ死ニ至ル也  
 故ニ偶ニ死ニ至ルモ八路ヨリ死ニ至ル也

兼又故ニ途ニ至ルモ八路ヨリ死ニ至ル也  
 八余ノ三路ニ至ルモ八路ヨリ死ニ至ル也  
 然有沈路有冰路有胆ニ大腸  
 陰路ノ道ニ至ルモ八路ヨリ死ニ至ル也  
 沈路ノ道ニ至ルモ八路ヨリ死ニ至ル也  
 モノアルハ沈ノ道ニ至ルモ八路ヨリ死ニ至ル也  
 通ニ沈ノ道ニ至ルモ八路ヨリ死ニ至ル也  
 脈勢ヲ示ス胆モ一々大腸ノ道ニ至ルモ八路ヨリ死ニ至ル也  
 中州ニ至ルモ八路ヨリ死ニ至ル也  
 胃ノ道ニ至ルモ八路ヨリ死ニ至ル也

外踝尖下  
筋中赤白  
肉際也

肺ノ中府令スル絡脈ナリ人  
陽絡者少陽之絡也

人身所經少陽之絡テ主ルハ少陽也  
此少陽ハ足太陽也其ノ別脈ニテ跟  
中ニ起リ外踝ヲ循テ足太陽ノ流ニ從テ  
上行シ爪也スルモナリ其穴申脈ニ從  
テ也此脈盛テハ行步外ニ向テ内ニ去ラス  
引動也此脈虚シハ行步内ニ向テ外ニ去ラス  
外ニキツル也

陰絡者陰陽之絡也

内踝下三指  
筋中赤白  
見シハ筋中  
筋中赤白  
中穴也張

人身陰經陰陽之絡テ主ルハ陰也  
此陰經ハ足太陽也其ノ別脈ニテ跟  
中ニ起リ内踝ヲ循テ上行シ咽喉ニ至テ衝  
筋ニ去ラス其穴ハ照海ニ在リ此脈盛テハ  
行步内ニ盛ニシテ外ニ去ラス此脈虚シハ内  
ニ去ラスシテ外ニ去ラス  
是任督ヲ不取シテ二絡ヲ用ルハ何ヲヤ  
皆腎膀胱ノ別脈ニシテ其氣一ナリ人其氣ニ  
任督ハ父ハ陰蓋ヨリシテ頭ニ至ルノコトニテ  
上下ヲウラヌクコトヲ絶ユハコト天ニ任督ヲ牽

テ陰。陽。ヲ急ニスルト見ルモノヲ急シコトヲ  
急シテ急クコト取ルナリ

故絡有十五焉

脈絡ハ陰陽内外表裡上下纏紐シ  
テ藏者有五聯属ス若翁氏成如シテ身  
体ヲ宛羅ス立於ノ新ルケテ説ス一カラス  
今又立要十五絡ヲ奉ルルモハ法陰コレヲ  
是ニ從ス

廿七難曰脈有奇經八脈者

脈トハ十二絡十五絡存ラズ也其脈ニ又三ノ奇

脈アリテ八脈存ス奇經ハウワハ也十二絡十  
五絡ノ奇經ニ外ニシテ十二絡ニ充テ十五絡ニ充  
テ十五絡ニ溢ルルモハ此奇經ノ脈ニ入テ其  
氣ハ上ノ氣也ニ出テ呼吸トナリ人其血ハ血也  
ニ入テ積テ固營ス女子ハ血多シテ中ニ積ニ  
溢シテ任衝ノ血也ニ入テ積アツシテ月事  
トナル也二幼キニシテ絶トキハ藏者有テ充  
シテ絶トキ者絶アツシスニテ三ノ奇經ニテ  
二ニ七ニ成教ヲ積テ有テ年ヲ経テ絶ニ絡  
アツルルモハ三ノ奇經ノ脈存シテ血也ニ積ニ

アツリノテノ月事トナル又年ヲトロフニ  
 至テハ其ハシメタルモノヨリヲトクテ格  
 ニメラス也カク府ニトモシク此ニ虚シ  
 テノハルサキリ考ノ所ナルニヨリテ音也  
 ト各々

不拘十二経何也

ハシメタルニ十二経ニ不拘ナリトハ十二経  
 ハ其ノ後始リ一日ニシテ五十卷ヲナスモノ  
 ニシテは其ノ循環スルモノナリ抑シ人ノ  
 血ハ中ニ生シ經ニ出テ格ニ此ノ徳也ニ入テ格

ニ出ツ五十周年八百十丈ノ法ナリトカレ氏  
 彼路ニハルモノ高ク又低シテハ百十丈ノ常  
 也ニ偏シ余斗ナルモノ俱ニ其ノ路ニ  
 是テ其処ニシテ其ノ路ニナリハ其処スニテ  
 ハ脈アリナリトハアツルモノハ其ノ路ニ  
 出テ呼吸ヲシ血ハ血海ニ入テ身ノ約束ヲ  
 ナスニナリ固ナリ故ニ常路トシテ  
 五十月身ノ長教ニハ其ノ拘ナリ其ノ律  
 ナルコトヲ書キテ文ニ於テ散見其ノ路ニ  
 好カキニヨリテ脈路ヲ説テ其ノナリノ

焚有伏維

伏ハ手足ノ三伏ノ脈ヲイフ、維ハ維格ナリ  
其脈法ノ伏脈ノ余穴ニ在テ維格シテ其  
伏脈ノ余穴ノ固クスニテ本脈ニアリモ  
ノ三ニテ寸口ノ脈ヲ固ルモノナリ、故ニ此奇  
秘ナラサルモノハ一身ニルテリ、ヲコタリ、身  
カシテ又ノ為ヲナス、其治金ノ大伏  
伏文ニ是ナリ

有陰維

陰トハ手足ノ三陰ノ脈ナリ、維ハ維格ナリ

有伏蹻

蹻ハ蹻捷を越ノ義ニシテ、此脈ニ血脈遠入  
シハ此脈盛ニテ下ヨリ上ノ行ノ勢盛ナリ、人  
ノ行歩ノ遲速ハ此脈通ル血氣ノ有無多  
少ニ依リナリ、其大伏膀胱經ニ在リトシテ別

リ、其脈諸ノ陰脈ノ余穴ニ在テ維格シテ

其陰脈ノ余穴ノ固クスニテ本脈ノ奇

ニシテ、其奇秘ノ為ヲナス者ナリ、此脈

ヲ失ハ陰平ナリ、ナク、惟トシテ、おニラ

ト早キ、内氣ノ下ノウレテ志ヲウレシナ

有伏蹻

蹻ハ蹻捷を越ノ義ニシテ、此脈ニ血脈遠入

シハ此脈盛ニテ下ヨリ上ノ行ノ勢盛ナリ、人

ノ行歩ノ遲速ハ此脈通ル血氣ノ有無多

少ニ依リナリ、其大伏膀胱經ニ在リトシテ別

ル脈之ニ次踏ト名ク此次踏ト名ク之致  
トキハ内踝ヨリ以上後ニテ外踝ヨリ上  
凡也也内踝ヨリ揚急シテ行步根ナリ  
有陰蹻

蹻ハ蹻捷起執ノ義ニテ此脈ニ血脉透入ハ  
此脈盛ニシテ下ヨリ上ノ赤ル脈勢ハヤキニ  
人行歩ノ連連ハ此脈ニ甚ク凡血脉ノ有無  
盛衰ニアツカル其少陰脈ノ別ナリヨリ  
此脈ト名ク此陰蹻ニ名ク之トキハ外踝ト上  
一節ヨリハ内踝ト上ノ内踝ト上ノ拘

胃  
三  
三

急ヲ為シテ行歩速ナラズ

有衝 衝ハ通也此脈ハ足ノ王政ノ毛十二脈ニ  
三十通入上下左右四通ハ達ノ衝ノ如ク血脉  
此所ニ在ルハ次明次上下四方ノ衝通ス此脈  
ハ陰氣ノ多ク在ルハ積痰血虫ニナリ其  
陰脈ノ中ニ生ス故ニ通氣ノ裡急ニ也  
有督 督ハ都督ニシテ次脈ヲ直リセシメ  
ニ八脈ノ督長トナレ者也陰中ヨリノ氣テ  
大程ヲ上テ凡也ニキツキ入テ腦ニ属ス次  
行ノ直脈ニテ此脈盛衰ニヨリテ上行ニ

屋脊存也此脉ニ血氣ヤバ火ノ程ニ次ニ  
 一ニノ位ニ居ルニ一ニハ居ルニ居ルナリ  
 有任 任ハ重ヲ負也其本衝ト同ク胞宮ヨ  
 リ出テ諸脉ヲ負テ直行スル大流ナ  
 リ小流ヲ行テ上行シ咽喉ニ至リ居テ  
 トフ陰ヲ行ノ諸脉ニテ此脉ノ血氣ニヨ  
 テ通リス此脉ヤトキニ下部ニ流ルナリ  
 長シテ元トナリ女子ハ此脉凝テ胎聚  
 トナ  
 有帶一脈

帶ハ血脉換ニケリテ帯ノ如ク十二經外ニ  
 東テ面身一周ス季秋下子ハ帯脉ノ穴ヨ  
 リ換ニリテ中氣ニトキハ腰腹倍慢ニシニ具  
 行動ニ堅ナリ  
 凡此八脉者皆ニ拘於地帶脉故曰三ノ經ハ脉也  
 此八脉ハ十二經十五絡ノ一日五十禁スルモノ余計ニ  
 シテ六經ノ五十度ニ拘ニテアソリナク  
 テ廟以ノ生ヲナシ故ニ奇ノ經ノ經ト也  
 凡有十二絡有十五厄二十七ノ相隨上下何  
 物ヲ拘ル也

再田偏ハ百家ハ五十ハ内ハ流ハ外ハニアルモ人  
何ノ為リヤ

笑聖人圓設溝渠利水道以爲不出

江水ヲ平テ以テ四海ニ導クハ古聖人聖智ヲ  
勞シテ圖リ設ク故ニ聖人ヲ奉テハトク大溝  
渠ハ田間ノ水ハ和訓ニグ也渠ハ深廣ノ白ト以テ  
見乏トキハ溝ノミツシ以テ水ヲ引テ渠ノ水ヲリ  
ニ入ルトライフハ今世ハ其ハ溝ニシテハ氣ハ出ル海  
ハ渠ナリハ十二ハ種ノ渠ハ外ハニハ其ハ溝ハ凡ハ不  
出ル傳ハ信ハナリハ人ハ三ハ時ハニハ變ハ内ハ肉ハニハ施ハ

トキハハ積ハ氣ハ上ハ美ハシテハ雲ハ雨ハ如ク三ハ隼ハ陰ハ陽ハ此  
水ハ氣ハアリシハテハ今ハ各ハ各ハ陰ハ陽ハ受クトク其ハ陰ハ陽ハ  
内ハ勢ハ若ク院ハニハアリシハ以テ田間ノ溝ヨリハシテ  
深ハ廣ハ渠ハニハ受クシハ若ク此ハ溝ハナク渠ハナクトキハ  
十二ハ種ノ渠ハニハアリルハ者ハ常ハルハ所ハナクシテ凡ハ者ハニ  
十ハ種ノ池ハトナルハナリ故ニ之ハ也ハ信ハトイフハ  
天雨降下ハ溝渠ニ溢ス

其常ハ十二種ノ渠ハ各ハ月ハ流ハ日夜五十ハ度ハ過ス及  
ナキ制アレル天雨降下シテ日ハニハ三ハ度ハノ  
録ハ言ハ積ハ水ハニハ聖ハ書ハ女ハノハ十ハルハトキハ十二種ノ



常流必スアリスレ溝ニ引テ渠ニ入ル  
当世時雨澤無常毒化聖人ヲ純潔(圖也)  
文選ノ注ニ雲常ノ水多臭ト云此ノ一毎ニ  
作ルモノハ聖人トイハレ其ノ取テ立テ内流  
ノ常ヲ預メハカルコト不純ニハ常ノ外ニ  
シテ存取尺量ヲ期セス其ノ引テ血氣ノ  
海ニ散ルモノナリ  
此ノ流ハ尾流ニ流テ之純潔拘也  
此ノ脈トイフハ此ノ脈ハ脈トイフヲ各アリ  
イトモニナリ脈ナリノ常ノ流ニ引テ入ルモノニ

十二諸經ノ五十ノ度管ノ常ニガウレエト  
之能ナリノ故ニ其ノトイフノ各ノ八藏者皆  
ノ正ハ多ク事ハ形成テ未熟ニトシ形セ  
サルニアラス其ノ形ヲ得テ其形スルヲ以テ  
ヨク実ノリ襲ル也此ノ常ニ是ノ命斗ニ  
テ本流ノ為ニ固クナス者ナリ此ノ聲言流  
テ靈素未発ヲ明カニスル也  
廿八難曰其ノ端(圖)章(圖)之ノ流ハ脈者既不拘  
六十二種何起何起也  
其ノ上ハ前編ヲサヌ其ノ脈十九者十二

十二  
音

者

經ノ梁肉行な事拘こて之也ニ傳テ奇  
零タル義前章ニ既ニ明辨アリ其十  
ニ經ニ之拘トキハ其起ル所ト  
其經ニ之拘ル所ノ者イフクニ由リテ始ル  
スルヤ詳カラス故ニ向テナリ  
然督脈者起下極ニ命並於脊裡上至  
府入屬於腦

下極ハ下ノ至極ナリ人ニ是ニ陰ノ下外其前ハ水  
ヲ通シテ高凌シ培陰ハ穀ヲ通テ最卑地  
故ニ下極トス此ニ命アリ長層トイフナリ

督トハ總督ノ義ナリ手足ニ三伏ノ脈海ナリ  
此海多滯スルハ六伏ノ脈ニナラス其脈之  
所ハ腎氣ヲノ発シ又腎ノ分ニ中テ溺孔ニ係リ  
前陰内ヲ循テ命陰ニ入り別シテ屬テ繞リ  
長層ニ寄ルナリ以上ハ内ヲ起発ル所ノ  
流ヲイフ此極ニ之極ニ起トイフハ外ニ出ル所ノ  
命ヲ指スナリ實ハ豆ノ外太伏ノ在極ヲ  
別ル所餘皆此渠海ニ流ルナリ是カハ脈ノ  
根ナリ十三極ノ正流ハ生来流注ナリ  
主トスル之上脘流ヲ出テ息ノ行

ヲアヤテラス世等の病ハ多クは徳命ヲ以テ  
主トスルユ一ニ支那大沢ヨリ起ル任トイフモ  
衝トイフモ此脈多クは其ノワル所ノ地  
黒ニヨリテノ名ヲ立テ分ルモノニシテ実ハ別  
物ニアラス其下極長屈ヨリ上行シテ脊骨  
ニ附テ肉中ヲ行キ腰分沢南命ノ髻祀有  
中中祀筋端至沢其其神道身往陶道大  
椎ニ上リ此ニテ手足三沢ノ筋ト會シテ極門  
ニ上リ沢維ノ脈ニ同會シテ入テ古中ニ繫  
リ上テ風者ニ至リ沢維ト同ク腦中ニ入り腦

戸強間後頂ヲ循リ巔ニ上リ百多ノ前頂  
顛會上星ヲ歷テ神庭ニ至テ且大沢ト  
會シ額中ヲ循テ鼻柱ニ至リ素髯ノ水溝  
ヲ過テ手沢筋ニ會シ兌筋斷更ニ入テ任脈  
ト交會ス可見大沢ノ筋手足三沢ニ會シ  
テ其後筋ヲ交テ此處ニ入りテ大沢ノ  
明手足三沢ノ為ニ衛固ナスエトテ越人其  
後筋ヲ交ルノモノニシテ往來ニカノワラサレ  
ヲ知テ長屈ヨリ起テ脊骨裡ニ並テ上テ  
大沢ノ筋府至テ腦ニ属ト云テ其文ヲ攝

心奉九ナリ是以老シバ人坐シテ必ヨリ  
直立シテ不跛者此脈ノ力ニシテ此脈  
不使ナキハ必ヨリ居テ躬倭直ヨリナク人  
年老テ身カクテリ腰カクテハ三十此海カレ  
モナリ又年老テ仰キ反リ伏コトヲ不  
均ハ任脈ノ海カレテ此脈ニカククナリ如レ  
テ死ニ不至モ人是レ正極ニアラスレテ壽零  
溢蓋ニカレ極ナレバナリ人三十ナク太陰ノ  
虛実ニカレルヲ知レ

任脈者起於中極以下以上毛際循腹裡上臍

元至喉咽

中極ハ臍下四寸ナリ人身ノ根元腎  
間ノ元氣在レ於ナリ其中極ノ下上指モ以テ  
ノ多ナリ腎中ヨリ出テ督トナリ其脈前脉ニ  
出テ陰毛際ニ上リ上行ス啓云子云任脉衝  
脉督脉ハ後ニ三岐ナリ故レニ或ハ衝脉シ  
謂テ督脉トス何以明シテ甲乙及古経脈流  
注圖注ニ以任脉循背者謂之督脉是列以  
背腹陰陽別ル名目也其初テ出レハ督  
脉ナリ任ト名レハ手足三脉ノ海ニシテ人任

其行  
外

中ニ養フ兼ルヲ以テナリ。手少陰ノ系ヨリ上  
行シテ中ニ出テ曲骨ヲ循リ、毛際ニ上リ、中  
指ニ至リ、足ノ少陰太陰ノ系ト同ク並テ腹  
裡ニ循リ、臍元ニ從ヒ石門ヲ出テ、臍ニ至リ、  
ニテ衝脈ニ會シ、神廟水ノ系ヲ循リ、足太陰ノ  
下腕ニ會シ、健里ヲ經テ手太陰少陰足少  
明ニ中腕ニ會シ、上腕巨闕鳩尾中庭臍中  
玉堂紫宮中庭之旋機ニ上テ喉嚨上テ陰維  
ニ天突、膻中、臍、臍上、系帶ヲ循リ、  
足少陰明ニ會シ、唇ヲ環リテ上テ斷交ニ至リ

フタヒ出テ分シ面頰ヲメクリ、西目下ノ中央ニ  
カ、リ、兼テ足ニ至テ、  
太陰トニ會シ、三昧ニ並テ、  
テ陰維衝脈トニ會シ、トモニ、  
固ヲ十久モ也、此脈之免トモハ、  
由テ利トモ也、

衝脈者、起於氣衝、並足少明、  
至胸中、  
至胸中、  
衝、  
上八、  
通、

衝、  
上八、  
通、

邪ニ膈中ニ  
入り腫骨ノ  
内ノ廉ヲ循リ  
テ

素

故ニ衝トイフ又血海トイフ仲系ノ血入血  
室トイフ血室ハ蓋シテラ指ス督脉上同ク  
足少陰腎經大絡トモ腎ヲヨリ出ルモノニ  
シテ外ニ八豆ノ穴ニ衝ノ穴ヲ出テ膝股  
ノ内廉ヲ循リ又少陰經ニ並テ下テ内踝ノ後  
足下ニ入ル其別ナ者八邪ニ蹠ニ入テ出テ附上ニ  
属シ大絡前ニ入ルモノナリ靈秘脉行ノ三ナ  
下注ヲ説テ其骨ニ属ルヲ説カシ其表ル可  
陰陽ニ初テ陰陽ノ上行ト和同シテ上行スル也  
アツチハ十二經ニ血海タルニ由リシ其脈也陰

素靈ノ骨ト  
説也然ハ男  
ヲ云

ニ並トイハレ亦次明内行ニ属ルニ在ニ八骨  
化ノ多キヲ説ク此ニ八骨和ノ多キヲ示ス骨  
氏ノ徒不変ニ置モノ難經ノ難タル何ニ由ルコト  
不知ナリ故ニ本文ニ並ニ次明ノ經夾脊上  
行ノ至胸中ヲ教トイフ其經ヲ循テ上行ニ摸  
骨ニ至リ時ノ左右ヲ摸テ各五分ヲ上行ニ  
大赫ノ穴ニ至リ胸中注テ右ノ高曲石南陰部  
通各山門ノ處ニ胸中ニ至テ散ス此脉膈ニ  
在テ膈ノ隙中ヨリ次ヲ通シテ升ル故ニ此  
脉之端トキハ中膈ノ處ニ散スル也

樞經別篇足

少陰之正至關中  
別走大陽而合上  
至腎當十四顛出焉  
帶脈直者繫脊本  
復出於項合於天  
此此為一合或以諸脉  
之別皆為正也

臆

帶脉者起於季脇回身一周

帶上束下諸脉之總束也謂柔者皆  
也之繞身一月之猶束帶如之此脉之季  
脇之起也上季脇之腋骨之季也此脉之厥  
陰之章內之穴也此脉之人身上下平分之中  
在之環紐也上之此脉之上下腎之出  
心之督衝之別流也此衝之宗筋之季之繞  
氣衝之季也此明之引之帶脉之屬也上同  
久此脉之季也足之陰之也至中別走大陰  
而合上至腎當十四顛出屬帶脉上之此脉

二送後十六身不固輕利スルコトヲ云

伏蹻脉者起于跟中循外踝上行入凡也  
督脉作最下一起也坐人坐ノ下モナリ蹻脉  
八足ノ最下ニ生ス是レ人立ノ下ナリ此脉はハ  
跟中ノ外踝ニ從テ身傍側ヲ上行ス傍側ハ  
傍阻地故ニ其行コト疾速ナリ人身ノ蹻捷此  
脉機動多ク係ルカレバ此脉モト是ノ大伏  
ノ別脉ニシテ跟中ニ出外踝ノ下足大伏申脉ノ  
穴ヨリ踵後僅テ寸之循上テ外踝上三寸  
附伏ヲ以テ却上股ノ外廉也

足少阴居髀<sup>二</sup>季<sup>一</sup>之<sup>二</sup>腋<sup>一</sup>腋上<sup>二</sup>循<sup>一</sup>手太阴<sup>二</sup>伏<sup>一</sup>  
 惟<sup>二</sup>腰<sup>一</sup>腋<sup>二</sup>季<sup>一</sup>之<sup>二</sup>肩<sup>一</sup>外<sup>二</sup>廉<sup>一</sup>上<sup>二</sup>行<sup>一</sup>手<sup>三</sup>少<sup>二</sup>阴<sup>一</sup>  
 明<sup>二</sup>巨骨<sup>一</sup>肩<sup>二</sup>髃<sup>一</sup>季<sup>二</sup>之<sup>一</sup>口<sup>二</sup>吻<sup>一</sup>又<sup>二</sup>夹<sup>一</sup>手<sup>三</sup>少<sup>二</sup>阴<sup>一</sup>少<sup>二</sup>阴<sup>一</sup>任<sup>二</sup>脉<sup>一</sup>  
 之<sup>二</sup>存<sup>一</sup>之<sup>二</sup>地<sup>一</sup>有<sup>二</sup>足<sup>一</sup>少<sup>二</sup>阴<sup>一</sup>明<sup>二</sup>上<sup>一</sup>同<sup>二</sup>上<sup>一</sup>巨<sup>二</sup>窞<sup>一</sup>二<sup>二</sup>行<sup>一</sup>キ  
 夕<sup>二</sup>足<sup>一</sup>少<sup>二</sup>阴<sup>一</sup>明<sup>二</sup>任<sup>一</sup>脉<sup>二</sup>兼<sup>一</sup>任<sup>二</sup>季<sup>一</sup>之<sup>二</sup>目<sup>一</sup>内<sup>二</sup>眇<sup>一</sup>二<sup>二</sup>至<sup>一</sup>  
 手<sup>三</sup>少<sup>二</sup>阴<sup>一</sup>太<sup>二</sup>阴<sup>一</sup>足<sup>二</sup>少<sup>一</sup>阴<sup>二</sup>明<sup>一</sup>任<sup>二</sup>脉<sup>一</sup>上<sup>二</sup>五<sup>一</sup>脉<sup>二</sup>ト<sup>一</sup>モ<sup>二</sup>眩<sup>一</sup>眩<sup>二</sup>  
 穴<sup>二</sup>季<sup>一</sup>之<sup>二</sup>眩<sup>一</sup>眩<sup>二</sup>季<sup>一</sup>之<sup>二</sup>上<sup>一</sup>行<sup>二</sup>レ<sup>一</sup>接<sup>二</sup>接<sup>一</sup>季<sup>二</sup>之<sup>一</sup>入<sup>二</sup>耳<sup>一</sup>接<sup>二</sup>  
 下<sup>二</sup>レ<sup>一</sup>凡<sup>二</sup>也<sup>一</sup>入<sup>二</sup>レ<sup>一</sup>可<sup>二</sup>見<sup>一</sup>七<sup>二</sup>脉<sup>一</sup>季<sup>二</sup>之<sup>一</sup>其<sup>二</sup>后<sup>一</sup>任<sup>二</sup>交<sup>一</sup>  
 又<sup>二</sup>ユ<sup>一</sup>ル<sup>二</sup>下<sup>一</sup>レ<sup>二</sup>此<sup>一</sup>脉<sup>二</sup>不<sup>一</sup>健<sup>二</sup>ト<sup>一</sup>キ<sup>二</sup>八<sup>一</sup>脉<sup>二</sup>弱<sup>一</sup>委<sup>二</sup>軟<sup>一</sup>若<sup>二</sup>之<sup>一</sup>九  
 又<sup>二</sup>為<sup>一</sup>ス<sup>二</sup>ナリ<sup>一</sup>

陰蹻脉者亦起於跟中循内踝上行至咽喉  
 交賀衝脉

陰蹻ハ前章ニ背側ニ行テ頭旁凡也ニ季<sup>一</sup>ス  
 ル<sup>二</sup>ト<sup>一</sup>シ<sup>二</sup>イ<sup>一</sup>フ<sup>二</sup>陰<sup>一</sup>蹻ハ<sup>二</sup>腋<sup>一</sup>側<sup>二</sup>ニ<sup>一</sup>行<sup>二</sup>テ<sup>一</sup>胸<sup>二</sup>傍<sup>一</sup>ノ<sup>二</sup>衝<sup>一</sup>脉  
 ニ<sup>二</sup>交<sup>一</sup>リ<sup>二</sup>陰<sup>一</sup>蹻<sup>二</sup>相<sup>一</sup>タ<sup>二</sup>ス<sup>一</sup>テ<sup>二</sup>蹻<sup>一</sup>疾<sup>二</sup>ノ<sup>一</sup>用<sup>二</sup>ヲ<sup>一</sup>ナ<sup>二</sup>ス<sup>一</sup>ト<sup>二</sup>也<sup>一</sup>  
 ヨ<sup>二</sup>ク<sup>一</sup>是<sup>二</sup>ヲ<sup>一</sup>考<sup>二</sup>ル<sup>一</sup>ニ<sup>二</sup>陰<sup>一</sup>蹻ハ<sup>二</sup>足<sup>一</sup>少<sup>二</sup>陰<sup>一</sup>ノ<sup>二</sup>別<sup>一</sup>脉<sup>二</sup>ニ<sup>一</sup>シ<sup>二</sup>テ<sup>一</sup>背  
 陰<sup>二</sup>ニ<sup>一</sup>然<sup>二</sup>骨<sup>一</sup>後<sup>二</sup>跟<sup>一</sup>中<sup>二</sup>ニ<sup>一</sup>起<sup>二</sup>リ<sup>一</sup>上<sup>二</sup>テ<sup>一</sup>内<sup>二</sup>踝<sup>一</sup>ノ<sup>二</sup>上<sup>一</sup>ニ<sup>二</sup>交<sup>一</sup>  
 信<sup>二</sup>ニ<sup>一</sup>至<sup>二</sup>リ<sup>一</sup>直<sup>二</sup>上<sup>一</sup>シ<sup>二</sup>テ<sup>一</sup>陰<sup>二</sup>股<sup>一</sup>ヲ<sup>二</sup>循<sup>一</sup>リ<sup>二</sup>陰<sup>一</sup>上<sup>二</sup>ニ<sup>一</sup>入<sup>二</sup>リ<sup>一</sup>胸  
 裡<sup>二</sup>ヲ<sup>一</sup>循<sup>二</sup>リ<sup>一</sup>缺<sup>二</sup>盆<sup>一</sup>上<sup>二</sup>ニ<sup>一</sup>出<sup>二</sup>テ<sup>一</sup>人<sup>二</sup>迎<sup>一</sup>ノ<sup>二</sup>前<sup>一</sup>頰<sup>二</sup>ニ<sup>一</sup>内<sup>二</sup>廉<sup>一</sup>  
 入<sup>二</sup>リ<sup>一</sup>上<sup>二</sup>行<sup>一</sup>シ<sup>二</sup>テ<sup>一</sup>目<sup>二</sup>内<sup>一</sup>眇<sup>二</sup>ニ<sup>一</sup>属<sup>二</sup>ス<sup>一</sup>手<sup>三</sup>少<sup>二</sup>阴<sup>一</sup>太<sup>二</sup>阴<sup>一</sup>足<sup>二</sup>少<sup>一</sup>阴<sup>二</sup>

咽喉ニ至リ  
 衝脉ニ交リ  
 骨キ



明伏蹻五脉上法合して上行す此脉ニ五五六凡ト七七八八跟踝ニカ十指ニカ十アリテ膝ノ委曲孔ノ委曲也ノ可見七脉ニ通して其レ後通之交テ其手皆ニ五ルトス

伏维冰维维结干身故伏维起於諸伏ノ舍也

伏维ハ諸伏ノ舍ニ起リ其脉足太伏ノ命門穴ニ宛シ外踝ヲ循リテ足ニ伏ニ伏ニ輔ニ舍シ外踝七寸ニ上テ足ニ伏テ伏光舍ニ伏ニ维ノ却ニ舍シ脇下ニ至テ足ノ太伏ニ命門穴ニ舍ス膝ノ外ノ廉ヲ循テ髀ノ厥ニ上レ脇ノ脇ノ循テ肩ノ後ニ至リ手ノ太伏ニ

腰脇ニ舍シ肩上ヲ過テ手ノ太伏ニ天髀ニ舍ス手ノ足

多伏ニ肩井ニ舍シ耳ノ後ヲ循テ手ノ足ニ伏ニ凡也

舍ス項ニ上テ督ノ脉ニ凡有瘡門ニ舍ス又腦空角

其レ上ニ營目定臨返ニ上リ額ヲ循テ足ノ多伏ニ本神

多伏ニ凡角至テ足ノ伏ニ明多伏ニ頭維舍シ

眉上ニ下ニ足ノ多伏ニ伏白舍ス可見其十四五舍

合ノ命ノ多伏テ其レ後通之交テ其レ後通之交テ其レ後通之交テ

其レ後通之交テ其レ後通之交テ其レ後通之交テ其レ後通之交テ

陰維者起於陰交也

其脉足ノ女陰ノ海ノ穴ヨリ起リ陰維ノ却

上レ上テ股ノ内廉ヲ循テ上行シ、  
 太陰、厥陰、少陰、上テ足、  
 太陰、大腸、  
 京ニ至リ、  
 上テ咽ヲ挟ミ、任脈ト天突、  
 上テ心見ル、  
 交手、  
 諸絶ノ交手、  
 本腎アリトイフモ、  
 其本ノ交手、  
 本腎アリトイフモ、  
 其本ノ交手、

腎持ニ本ノ久、  
 溢、  
 此十二字、  
 腎持ニ本ノ久、  
 溢、  
 此十二字、

比干聖人圖設溝渠、  
 深廣ノ形ニシテ、  
 溝渠ヲ深、  
 比干聖人圖設溝渠、  
 深廣ノ形ニシテ、  
 溝渠ヲ深、

人

滿溢スルモノハ血氣ハ海ニ流ル深湖ハ氣海也血海  
 ナリ其流テ深湖ニ入ルモノハ心經ニカレナリ  
 三 心ノ氣息ト散シ血トアツテテ心トナリ  
 フタヒ心經ニアツカラス  
 故聖人不能拘通也而入脈隆盛入於八脈  
 環周 人脈隆盛十二ハ八脈ニ入テ本ノ心經ハ  
 心環周也  
 故十二經亦不能拘之 身中諸脈隆盛十二ハ  
 唯八脈ニ入テ冥ニタリ故十二經モ亦何リ  
 此ニカレワリ通ユトナラズ也

其受邪氣畜則腫發 砭射之也

抑ハ八脈ハ正經ニ異ニテ天兩降下ニシテ  
 需ニタリニ発リ正經ニ遠ルモノニテ此脈ヲ  
 ナシテ溝トナリ深トナリ氣ハ三海ニ流テ  
 呼吸ナリ血ハ月經トナリヒテ脈毛トナリテ  
 人身ノ余氣ニ傳フ其脈若シ邪氣ヲ受キハ  
 脈聚畜ニテ赤腫發癰トナリ最モ壅盛ノ勢  
 ナリニ次ニ屬シ辛チ終極肌表ニ浮ニテ邪ノ  
 勢虚成ナリ九汁ノ能ク傷ヲ用ニシテ  
 砭石ニ以テ淺クハヒコロクヤフナリノ射ノ字不

重し六其手術ノ神速ナリ示ス斬凡恙ヲ  
妻宗吉ノ劉子ニ属シ種藝ノ二字又害死ヲ  
示ス廿九雜ノ八脈ノ名志ヲ尋ムル以テ虚志ヲ  
うつ故ニ此末ニ百ヲ立テ後章ト別ヲ示ス其  
旨深シ衍トイフコトナシ

廿九雜曰吾臣ニある何也

八脈二子同上篇ニ種藝トイフ有示外邪ヲ示此篇ニ示

内傷ヲ示ス故其義亦別也

災伏雜ノ于伏陰雜ノ于陰伏不能自相維也悵

先志悵ノ文能自收也

維ハ格ナリ人何間ニ災病ニ或補骨石解ニ  
一氣伏維ハ該伏挫ヲ維格ニ陰維ハ該  
陰維ヲ維格トイハ其天中骨筋ニ出ルヲ  
以テ骨筋ニ是也八早田如ニシテ天雨アリト  
イハ八脈ニ流ルコトヲ施シテ正格高ニ是ナリ  
故ニ骨ノ志ヲ藏ヘキモノアリトイハ不固ニ  
悵也下ニシテ先志ス性也ハ先志ノ貌也骨筋  
ニ流レキモノアリトイハ心皇ニ一ニ悵トシテ収  
持スルコトヲ維ナリ悵ハ獲優ノ自トイハ  
欲ニ是モハ腰悵トシテ神志ニ也凡

光明 在足外踝  
 上五寸  
 大伏膝腕  
 在外踝上  
 七寸

引三十步居之... 二維ノ多格ヲ  
 見ルハ八脉ヲ治シ胆ノ多岐心宛ル伏ニ  
 取ル是ハ合也... 里五寸也  
 ○伏維ノ多苦ニ其陰維ノ多苦心痛  
 伏維ハ膝屈胆經ニ係ル其行一... 陰維經行後  
 大伏少伏ナリ人好ニ之ニ後ニ苦ム多岐ニ取ル  
 陰維ハ胃經ニ起テ胆中ニ注テ心包ニ交ル  
 二ニ心痛ヲ苦ム或伏ニ取ル  
 陰維ノ多伏多ニ注ニ急... 健步虎膝ノ心  
 陰維ハ胃經ノ外脈ニ一ニ又行可ニナリ

腹側ニ行テ胸腰ニ衝脈ニ交ルニ... 骨ノ合經ニ  
 陰維ナリハ此脈不充ニ一ニ行歩ニ當テ陰多拘  
 急ニ一ニ其伏ニ一ニ久水泉ノ穴ニ治スニ  
 伏蹇病陰緩而陽急... 桂枝加附子湯  
 伏蹇ハ膝屈ノ別脈ニ一ニ其行ニ身ノ外  
 側ニ行肩膊ニ上行ス膝屈其骨ヲ不足スルハ  
 此脈ニ充ルニ不及ニ一ニ行歩動作伏ニ急ニ一ニ  
 其伏ニ一ニ一ニ僕承ノ穴ニ治ス  
 衝之為病逆氣而裡急... 金匱溫經湯  
 局方温經湯... 若宿疾也... 壯丹也ニ患也

或千金增損健中丸

此脉モト督ト同久腎ニ生じて胃脘ニアラフ心  
腎氣ハ多陰トキ此脉早地トナリ其氣ヲ  
十又三下ニ固じて上ニ通ス下ニ固ス  
二ニ腹裡拘急ス其衝ニ治ス

督之の脈 脊屋ニ之軟。重麻ニ仙舟

此脉腎氣ヲノ奔シテ八脉ノ總タリ人ニカモ脊  
裡ニ行テ尻脊ニ至ルニ腎氣ニ陰陽ノ脈ナシ  
ハ此脉早地トナリ之ニ脊脊カワテ一屈リ脈勢  
下ニ不足之ニ脈不長屈又治シテ其腎ニ病ス

鐘丸

任之為病其内苦結男子為七疝女子為瘕聚  
○固春延齡固本丸 ○向方壯母心之要方

千金以養心丸 温經丸

此脉本腎氣ヲノ奔シテ小腹中其裡ニ上テ  
咽喉ニ至ル之ニ腎氣ハ心腎内ニ不足之ハ此地ニ  
陰陽ノ勢ナクシテ早地トナリ之ハ女子ハ妊ナクアル  
モ又又主カラズシテ胎兒其内トハ評林ニ膈也  
ト注シテ心腎氣結シテ不行陰氣ノ久シキ  
男子ハ疝トナリ女子ハ瘕聚トナリ七疝ノ各  
ハ諸疝トイフカ如し厥擊之レ瘕聚復氣ノ

名アリ八夜ニモ八夜アリ、七夜ノ名ハ三子  
後世ニ出ル素夫多クニシテ第一十ノ男子  
八夜ニ属ス七八夜ノ名ナリ、其夜八夜ノ  
ニ七夜トス、女子ハ八夜也、八八夜ノ名ニ其夜  
ニ婦人ノ八夜トス上ニ七トイフテ下ニ八トイ  
フナルハ其夜ノ指一カラナルノ意ヲ示ス中夜  
ニ属ス

帯ノ名ハ八夜ノ名也、坐水中

伏見中ノ  
弓方安息屋ニ在リ

此夜モト骨ニ在テ肝ニ是ハ心中ニ在テ環紐ヲ十  
ス肝骨其正夜ニ属スセシハ此夜ニ在ルノ勢

十クシテ其帯タリモノ石固クニニ海夜ノ名ニ  
ニ夜ハ八夜ノ名也、坐水中ニ坐  
ルハ水中ニ坐ルハ其夜ヲ云ニアラス、夜動シテ  
膝限ノ名ニ形様ス、幸内ニ取ル

此夜ハ八夜ノ名也

素夫ハ八夜ヲ論ル故在シテ後死ナシ、石ノ  
如ハ八夜ノ名ニ連夜ス、定ニ其夜ノ名ニ極メ、又ハ  
八夜ノ名ニ在リ、形成テノ後ニ於テ是美ヲチ  
ストニ成トコ、ニ在リ、ニ詳番ニシテ素夫ノ  
略ヲ補フ、シカモ又言ニ肝骨ニ有ニ余セシハ

十月

雷震ノ如クハ大至度ノ事ナキヲ知ル  
 世雅曰柔氣之行常々厲氣相隨不  
 人ノ生ルハ其ノ天ニ出テ父母ニ因テ一身ニ  
 主トシテ其ノ天ニ出テ父母ニ因テ一身ニ  
 二受ルノ氣ハ保合シテ身體ニ免ラズ故ニ  
 其ノ哺ト水穀トハ天ニ父母ニ受  
 ル所同ク相並ルモノハ其ノ天ニ受  
 シテハ異到ニシテ並ユト云純クニ其ノ天  
 穀トクモ中ニテ有實ニシテ化シテ氣ハサシ

天ニ受ルモノト同類ナラシム其化シテ氣ハサリ  
 天ニ受ルモノト口ニ受ルモノト併合シテ  
 氣トスルニ及テ三ノ區別ヲナス故ニ三名ヲ  
 設ルナリ彼ノ天ニ受テ人ニ主ナルモノハ形  
 色ノ質ノ跡ナシ其合ニヨリテ併テ身ニ充  
 ルニ至ラテハ氣ハアリ質アリテ跡ナリ故ニ穀  
 九男ニ入テ天ニ受ルモノト一則ニ化ルモノ  
 一名穀氣一名男氣ナラズ此氣ハ雀ヲ得ニ  
 於テ傳化シ直上ニテ肺ニ宿ス其得ニ化シ得  
 ニ得ノ間ニテ胸中ニ積テ雲霧ノ聚ルカ如シ



奉

其氣者ノ處ヲ胆中ニ言ル下ノ入其氣ハ海  
ニ積モノ天ニ受ル無形無色ノ氣ヲ達シテ  
初テ喉嚨ニ出心脈ヲ受テ呼吸ヲ行ク其氣  
ヲ命シテ宗氣ト名ク宗氣ハ原ナリノ祖宗  
ノ家ニ於ル也其氣ヲ化シテ元氣ト名ク  
ナリテ便合スル者ノ始メ也其胸中ニ積テ喉  
嚨ニ出テ心脈ヲ行フ者ニ從テ其氣ヲ車出  
ルノ氣ニ積英(濃)蜜ト云フアリテ其行クト不  
極ニテ寛裕自如ニ計ト化シ血ト變ヒ心脈  
及ニ從テ肺ニ注キ始リ其行私ナク一ニ宗氣

隨

ノ呼吸ニ隨テ踵尾ノ中ニ往テ膀胱ニ注キ半  
此氣ノ行キ且ノ少腹ニ注キ且ノ大腸ニ行キ腹  
水好能ニ注キ且ノ宗氣ニ隨テ十二經路中ニ  
行テ私ノ行ナキモノアリ是ヲ經氣ト云フ  
榮ハ榮氣ト云フ身内地氣ニヨリテ内ニ充  
府ヲ至テ榮ニスルヲイフ也此氣ハ胃中ノ穀ノ  
氣ニ出トイフ也水毒中ノ積毒ノ氣ナリ  
積毒ノ者ハ榮氣ト云フ祖氣ノ者ハ衛氣ト云フ水毒ノ  
氣ハ之中焦ニ出トイフ其好能ニ注クハ肺  
ニ始ル之ニ上焦ニ出トモイフ又胸中ニ

寃字

積テ喉嚨ニ出テ以テ心脈ヲ貫クノ宗氣ハ  
從テ又胃中ヨリ連出ルノ氣ニ祖氣ニ稱ス  
十九氣アリテ下ノ氣ニ子孫傳傳ニシテ計ト  
和シ血ト化スルノ處ナク宗氣子ノ呼吸ニ從テ  
ニイトテ十ノ息言ハ傳傳傳傳ニシテ下ノ  
ニ出ルノ氣脈中ニ循コトヲ又ハ其ノ方ニ  
シ傳傳傳傳十名ノ傳ハ後ナリノ身外世言  
アリテ和ノ外ヨリ侵モノヲ傳傳傳傳世言  
ハ日ハ水素ノ氣ニ出トイハレニ十傳傳傳氣味  
ヨリ化出スル処ノ者ナリノ是ハ後ハ人ハ

營ニテ祖氣ノ者ハ衛ニツ其種隨ニシテ  
ニ其行コト連疾ニシテノ宗氣ノ呼吸ニ出  
テ營ニテノ氣脈ニ入ルヲ又傳傳ニシテ下  
ニ出カウ故ニ衛ニテ出テ下ニ出テ下ニ出  
ニ出トイフニ説シテノ水氣ノ糟粕ヨリ是  
シ出スルノ下ノ下ノ若シハ十九ノ上ニハ此  
氣ニ養身シ不覺ニカシ伏見宿氣良ノ子  
ナルモノ辨シテノ下ノ下ニ出テ下ニ出  
上ニ出テ其傳傳ナルニヨリ上ニ出  
出フコト論ス不知此上ニ出テ下ニ出

足太伏  
手太伏  
伏明手伏明  
復足太伏  
力元足太伏  
心肝胆  
骨

イフハ上佳<sup>ク</sup>出テ下佳<sup>ク</sup>出ノことナリ人先<sup>ク</sup>出ノ  
見ル所ハ上佳<sup>ク</sup>出テ下佳<sup>ク</sup>出フノ意ニ後  
シテ下<sup>ク</sup>出テ上<sup>ク</sup>出テ上テ頭ニ行<sup>ク</sup>昼ハ足ノ  
徑テ目ノ眇<sup>ク</sup>出テ上テ頭ニ行<sup>ク</sup>昼ハ足ノ  
太伏<sup>ク</sup>始リ六伏<sup>ク</sup>行キ夜ハ天氣<sup>ク</sup>脈ニ  
入ル<sup>ク</sup>後<sup>ク</sup>足<sup>ク</sup>太伏<sup>ク</sup>始リテ六伏<sup>ク</sup>行キ  
復骨<sup>ク</sup>注<sup>ク</sup>昼伏明<sup>ク</sup>二十<sup>ク</sup>廿<sup>ク</sup>夜<sup>ク</sup>太伏<sup>ク</sup>廿五<sup>ク</sup>其行  
宗氣<sup>ク</sup>不<sup>ク</sup>足<sup>ク</sup>自<sup>ク</sup>行<sup>ク</sup>各<sup>ク</sup>處<sup>ク</sup>處<sup>ク</sup>分  
肉<sup>ク</sup>走<sup>ク</sup>匠<sup>ク</sup>人<sup>ク</sup>善<sup>ク</sup>八<sup>ク</sup>衛<sup>ク</sup>氣<sup>ク</sup>自<sup>ク</sup>眇<sup>ク</sup>上<sup>ク</sup>上<sup>ク</sup>

一也寤ルハ太伏<sup>ク</sup>入ル<sup>ク</sup>ナリ營陰<sup>ク</sup>多<sup>ク</sup>衛伏<sup>ク</sup>ス<sup>ク</sup>チ  
キ人<sup>ク</sup>不<sup>ク</sup>且<sup>ク</sup>十<sup>ク</sup>カク<sup>ク</sup>眠<sup>ク</sup>未<sup>ク</sup>夜<sup>ク</sup>十<sup>ク</sup>カ<sup>ク</sup>二<sup>ク</sup>陰<sup>ク</sup>  
ユ<sup>ク</sup>ユ<sup>ク</sup>ニ<sup>ク</sup>ヨク<sup>ク</sup>寐<sup>ク</sup>ル<sup>ク</sup>營<sup>ク</sup>陰<sup>ク</sup>ス<sup>ク</sup>チ<sup>ク</sup>キ  
人<sup>ク</sup>未<sup>ク</sup>平<sup>ク</sup>且<sup>ク</sup>十<sup>ク</sup>カ<sup>ク</sup>ニ<sup>ク</sup>ヨク<sup>ク</sup>サ<sup>ク</sup>メ<sup>ク</sup>夜<sup>ク</sup>ニ<sup>ク</sup>テ<sup>ク</sup>尚<sup>ク</sup>昏<sup>ク</sup>也  
ナル者<sup>ク</sup>也<sup>ク</sup>衛<sup>ク</sup>氣<sup>ク</sup>キ<sup>ク</sup>ハ<sup>ク</sup>色<sup>ク</sup>赤<sup>ク</sup>ク<sup>ク</sup>葉<sup>ク</sup>ク<sup>ク</sup>色<sup>ク</sup>白<sup>ク</sup>ク<sup>ク</sup>力  
ク<sup>ク</sup>如<sup>ク</sup>ク<sup>ク</sup>十<sup>ク</sup>カ<sup>ク</sup>ニ<sup>ク</sup>テ<sup>ク</sup>營<sup>ク</sup>陰<sup>ク</sup>中<sup>ク</sup>ニ<sup>ク</sup>行<sup>ク</sup>キ<sup>ク</sup>衛<sup>ク</sup>氣<sup>ク</sup>  
脈<sup>ク</sup>中<sup>ク</sup>ニ<sup>ク</sup>行<sup>ク</sup>ト<sup>ク</sup>也<sup>ク</sup>以上<sup>ク</sup>三<sup>ク</sup>十<sup>ク</sup>宗<sup>ク</sup>氣<sup>ク</sup>營<sup>ク</sup>陰<sup>ク</sup>衛<sup>ク</sup>氣<sup>ク</sup>  
分<sup>ク</sup>テ<sup>ク</sup>ナリ<sup>ク</sup>人<sup>ク</sup>身<sup>ク</sup>中<sup>ク</sup>ニ<sup>ク</sup>行<sup>ク</sup>テ<sup>ク</sup>三<sup>ク</sup>十<sup>ク</sup>處  
氣<sup>ク</sup>行<sup>ク</sup>リ<sup>ク</sup>ノ<sup>ク</sup>義<sup>ク</sup>ヲ<sup>ク</sup>論<sup>ク</sup>ス<sup>ク</sup>ル<sup>ク</sup>也<sup>ク</sup>營<sup>ク</sup>陰<sup>ク</sup>中<sup>ク</sup>ニ<sup>ク</sup>行<sup>ク</sup>キ<sup>ク</sup>營<sup>ク</sup>陰<sup>ク</sup>  
不<sup>ク</sup>也<sup>ク</sup>難<sup>ク</sup>ノ<sup>ク</sup>義<sup>ク</sup>ヲ<sup>ク</sup>論<sup>ク</sup>ス<sup>ク</sup>ル<sup>ク</sup>也<sup>ク</sup>於<sup>ク</sup>テ<sup>ク</sup>生<sup>ク</sup>命<sup>ク</sup>ノ<sup>ク</sup>後<sup>ク</sup>ニ<sup>ク</sup>ヨ<sup>ク</sup>ル

一云や衛氣は中脘より行きて後を先へ行きや氣  
之向を言ふ実素雅ノ奥多あり故に營氣之  
行や常々衛氣に相造り不同フテ守氣に之不同  
字者猶雅彩ヲ養クキヨキ人  
炎煙言人受氣於穀之入於胃乃傳與五藏者  
五藏之府皆受於氣

人有生ノ始ハ天ニ出テ父母ニヨル其氣皆間ノ  
動氣ト名テ天地ノ大極人身ニ在トキ各ナリ  
天上ノ作ニシテニアララス限ルニ軀体ト以テ  
軀体ナキハ世ニハ天地ト同ニ軀体アルスラ

尚鼻ニ天ニ接シ口ニ地ニ通ス故に此氣ヲ天ニ經キ  
表ニ於テ上士ハ食霞服氣スルトキハ其表ニ  
カケルコトナシ中士ハ服食シ下士不知之トキハ  
其天氣ニ同キ氣ヲ受テル者ヲ求テ食シ  
テ健キ表ニコトヲ教ス是ヲ水穀トス故ニ水穀  
ニテ直ニコトキ表ニコトナシ胃中ニ轉化シテ  
氣類トナシテ人皆霞服氣ノ類ト同一ニテ氣  
類トナシテ養子ナリ故ニ師言人受氣於穀  
入胃乃傳與五藏之府五藏之府皆受於氣  
トイフテ穀モ氣ニ化セサハ五藏不受其氣

葉血ハ脉類  
 ニシテ其出ハ  
 葉ニシテ其  
 象ハ脉上  
 是伏ヲ脉  
 生衛言ハ  
 陰言ニ生テ  
 其言ハ伏上  
 十有是之脉  
 ヲ出テ  
 伏トナル

宗氣也ト云フニカク三氣ヲ分トイハトモ其  
 要ニテ宗氣ニ惣スル  
 其法也るる宗氣也るる也

其脾胃ニ化付セラシテ胸中ニ積ニ至テ喉嚨  
 ニ出テ心脉ヲ養キ呼吸ヲスル氣先天ノ氣ヲ  
 奉シテ宗氣トス此宗氣ハ氣ニシテ質ナシ  
 大極ノ如シ其運化ノ氣積厚濃密ナルモノ  
 又化シテ汁トナリ宗氣心脉ニ養ニ任テ養ニ  
 入ル故ニ其汁赤色ニ化シテ葉トナル其運化ノ  
 氣粗者汚雜ナルモノ喉嚨ニ出ル氣ニ從テ

卷ニ

アフシテ伏脉ニ出テ葉ニナトナル  
 葉ハ水穀ニ出ル清毒ノ氣之汁トナリテ

宗氣心脉ニ從テ葉トナリノ節從テ肝ニ從  
 ル之レ也是中ニ行テ呼吸ノ息ニ從テ入ル故ニ流  
 中ヲ行トナリノ衛ハ水穀粗汚ノ爲氣ニ出  
 ルニ變シテ質アリ相リ如ク霧ノ如シ  
 テ宗氣ノ肺ニ出ルニ從テ膚表ニ走リ伏脉  
 ヲ追テ出ワ終始無断ヲ追テ伏脉ヲ行トイ  
 ハトモ其脉中ニアラス故ニ脉外ヲ行トイフ

深 次七上毛

榮周不見五十一而獲會。陰伏相貫如環。其為  
 采周、榮運周旋。水穀之精、二出ルモ、  
 陰類ノ血トナリ、水穀ノ陽ニ出ルモ、八、伏動ノ  
 烟氣トナリ、是レ、宗血ニモ、宗氣包含シ、衛氣ニ  
 毛宗氣包含シテ、脉中、伏アリ、伏中、脉アリ、  
 宗氣、兩ノ、偶シテ、其真既注ニテ、宗氣ニ  
 子ル、榮血、脉中ニ行也、呼吸ニ後、一、衛氣ノ  
 平且ヨリ、伏注ヲ追也、榮血ニ就ク、脉注ヲ追  
 也、榮血ニ就ク、層ノ上、佳ニ化ル也、血トナリ、下ニ  
 就テ、原シレタウ、衛氣ノ下、佳ニ出ル也、氣ト

ナレハ上ニ就テ、淺シレタウ、一升一降、五ニ其根  
 シ、ニシテ、相通ス、故、榮周ノ二字中、榮ハ、榮ニ  
 就キ、榮ハ、衛ニ引ル、義アリ、故、營ノ血ヲ主  
 テ、在內モ、必ス、氣ノ引シテ、外ニ在、外テ、氣  
 ヲ主ルモ、必ス、榮ノ行度ヲ、顧ル、然トキハ、在外ノ  
 衛氣中ニ、營氣ヲク、内ニ在、營氣中ニ、衛  
 氣ヲク、今ノモ、其時、處位ニ、從テ、名アル、  
 ニ、宗氣トイフ、レ、宗氣モ、亦元氣ナリ、元氣  
 ニカレバ、天地ト同シ、天地ト同シ、大衍ノ五十  
 ニシテ、復大、五ス、レ、陰、伏、相、貫、如、環、之、每、端

毛ハ天地ノ道ナリ  
故知榮衛相隨也

灵柩ノ衛氣ヲ行爲ハ升降ノ象ナリ  
イフ此篇ノ生者ニヨリテ此一化ヲ養明ス二  
煙ノ言並行ル不相害也也所生有之動爲  
ハ榮ハ脉中衛ハ脉外ノ法ヲ用七十一難ノ  
刺榮ニ傷衛刺衛ニ傷榮ノ義モ同シ  
失血崩帶ニ産後金匱者血脱ニ独多ク  
用ルハ宗氣ヲ助テ榮血自ラ攸ルノ法也  
世一難曰三焦者何生何始何終其主治者

在何許可曉以不

腎間ノ水ト質ニアラス形ニアラス元氣ト  
イハレ形跡ノ見キマラス故ニ真トイハレ神  
トイフ其神ニ奉ヒテ使令ヲナシ水穀ノ  
府ノ裏ヲ鼓動スル氣アリ心神ニ心主アル如  
シ其氣ヲ三焦トイフ形状ナクシテ人シカモ  
氣質ノ可覓アリノ心主ト俱ニ有名無形  
ト指スシカレ心主ニ於テハ世一難已ニ心經ノ  
別脈ト説出ス同ク有名無形ニシテ此三焦ハ  
何處ノ別脈トヤ諸君諸君ノ子ノ事

求

スル所アリ人肝ハ木氣ニ受ケ心ハ火氣ニウケ  
腎ハ水氣脾ハ土氣肺ハ金氣ニ稟ク今此  
三焦ハ何ニ稟受シテ何クニ生シ何クニ始リ  
何ニ終ル其虛實アルトキ何ノ詳ニ主名セ  
ンヤト問フ也

三焦者水穀之運化氣之所始也  
水穀之於下ハ水穀通行ノ処ヲサス右府ノ  
主ル職ニ總管スルヲイフ凡腸ノ受ケ大腸ノ  
傳勝之ヲ蓄胃ノ府ノ積各其職アリト  
イハレ三焦ノコレヲ總ルアルハ三焦ノ職ヲ

怠リ人任ニ私シテ育養轉導ニチアヤセル  
其三焦ノ水穀ニ於テ終スルモ人氣ノ始スル  
所ナシハ也此氣ノ字ハ腎間ノ元氣ヲサス腎元  
此三焦ニヨリテ始ル腎元ハ三焦ニ在リ  
テ三焦ハ腎元ノ別使ナリ廿五ニ心主トハ心  
ノ別脈ト説キ此ハ三焦ノ元氣ノ別使タル  
ノ地ヲサス其稟ト始ルト下文ニ説キス原  
氣ニウケ胃中ノ穀氣ニ依テ生シ二便ニ終  
ル也  
在胃上口主内而不出其治在膻中玉堂



下一寸六分直兩乳間陷者是

心下鳩尾之上也心氣在肝下也下膈小

胸ヲ胸上トイハ高ヲ下膈トイフ胃ノ上口

トハ鳩尾ヨリ下二寸五分こしテ上脘ノ穴

ニ在リイフ内面ヲ出トハ飲食ノ口ニ入テ胃

脘ヲ脘ト胃ニ入り内テ不出コトヲ主ル膈中

ハ穴名ナリ任脈ノ穴玉堂モ任脈ノ穴ニシテ天

突ノ下五分也兩乳ノ間陷中是ナリ言ハ

三焦ノ中ノ上焦ハ元氣ヨリ別シテ上ノ升リ

胃ニ就テ胃ノ上口ヲ膈管ス胃口也氣

徳ヲ得テ飲食口ヨリ入テ能ク容受シ

不出コトヲナクモハ一二此上焦ノ為ス所也

又胃口也此氣ノヲ代管スルノ氣在

ナケルハ飲食入トイハ即チ出ツ噎膈身

滿吐逆胃反ニナリ是ニヨリテ榮ルナリ其上焦

ノ主治ル所胆中ニ在テ氣管ニ於テス乃チ膈

以上至咽ノ飲食出入ノ處ニナリコトニ上脘

ニ在テ其主ル所ハ胆中ニアルヲイフ胃ノ治

ヲ施モ此処ニ向テ手ヲ下ス

中焦者在胃中脘不上不下主腐熟水穀

其治在脘脘

中脘ハ胃管ノ在中脘上四寸ニ其穴アリ  
不上名下ハ上脘ニ入ル所ノ水素シ此ニ留テ  
克化スルノ所也。胃積シテ上ノ名出下ノ  
之世此所ニ在テ腐敗シテ久シク胃アリト  
凡此中脘ノ氣其胃ノ代管トキハ尅化腐敗  
功ナクシテ膨脹壅滯シテ飽ルヨリ実ニ  
中脘ノ氣ハ此中脘ニ在トイハ其生ル所ハ脘ノ  
兩傍腋季ニ至テ寸許ニ命ヲ受テ故ニ脘  
脘ニ事アルハ皆中脘ノ係ル所ナリハ脘ヲ

施モノモ此所ニ就テ年ヲ下ス脘脘左右ノ  
諸穴ニナカユニ取ルナリハ

下脘者當脘脘上口主分別清濁以代胃  
主出而不内也其治在脘下

脘脘ノ上口トイフトモハ少脘下脘ニ屬スルニ  
前ハ脘脘ノカカリ後ハ大脘ニ屬ス下脘ノ氣  
彼胃氣ノ余ヲ奉シ此地ニ代管シテ胃  
大ヲ脘脘ノ腹ヲ通シハ胃大ヲ脘脘ノ氣ニ  
ツテ各其職ヲ司ムニシテ脘ノ水液ハ  
前ニ送リ後ノ遠澤ハ後ニ送ル此下脘ハ

後居ヲリ出ス而色テ夕入ル所ナシ故ニ出  
ミ不内ヲ主ル凡胎下ノ諸事ニナリ此下焦ノ  
管領ニ從フ失職トキハ瘧疾ヲ秘結滯  
教浮利成癆故ニ治ヲナス者モ此所ニ手  
シ下ス心脈流完ニナリ此治ナリ旧本ナリ  
ニ字ハ註語ノ誤入ナリ  
故名曰ニ焦其府在氣街

元氣ノ別不往所ナク不主所ナシ今胃ノ上  
中下ニ在テ胃大ヲ勝ノ管氣元ニナリ此バウク  
名ヲ三焦トイフノ心其實ハ通体ニ氣ハナリ

胃大ヲ勝如ク一所ニ拘ルニナラス故ニ焦ノ名  
アリトイヘ凡實ハ其府トスル所氣街ニアリ  
氣街トハ街トハ汗道ノ謂ニシテ人ノ通リル所  
ナリ六府ニナリ經ニ有ルニ有街膈氣有  
街頭氣有街睡氣有街トニナリ氣ノ街通ル  
所トイフ十三經ノ意元ノ氣ニナリ三焦ハ  
三腕ニ體トイフトモ用ハ月身ニ存余ナリ  
世ニ難曰五藏俱著而心肺獨在膈上  
者何也  
五藏トモニ七神五志アリテ一藏之其

徳  
同考ニシテ子早アルカウホルモ也然モ  
心脾ノ二氣ハ鼻上ニ位ス而シテ得肝胃ハ  
膈下ニ居ス其他臟ト相懸ノ意何ヤ  
胃トハ膈ナリ人遠隔ノ義凡人ノ心下ニ胃  
膈アリト云脊背ト内面シテ相着ク胃氣ヲ  
遠隔シテ上ニ神明ヲ董モシメ此ノ為也  
然心者血脾者氣血乃榮氣ハ心脾相抱  
上下謂之榮衛通行於身宮内於外  
人ノ生氣ハ天ニ原ガ父母ニ受ク嗣之モ人ハ  
亦氣ニ受クハ異類ナリ人ハ父母ト持テ

異ニスルユ大父母ノ天地ニ資テ口鼻ヨリ天  
地ノ物類ヲ求テ其水穀ヲ化シテ氣類トシテ天ニ  
原キテ父母ニ受ルモノヲ相授ス其水穀ノ氣ニ化ル中  
佳ヨリシテ胆中上焦ニ出テ宗氣トナリ喉嚨ニ出ル  
モノハ肺ニ從テ氣トナリ外ニ出テ衛氣トナル其宗  
氣ノ汁ト化シテ心脈ヲ貫トキ心トナリ經路ニ入テ  
營血トナルニモノ其奉一ニ出テ心ト脾ニ成ル衛  
氣ノ霧ノ如クニ升トイヒ若シ血中テハ乾テ蒸  
コトナシ血而流ノ如クニ降トイヒ若シ氣中テハ  
滯テ流コトナシ氣血相隨テ一上一下ス

故二相隨上下トイフ也。脈中經外ニ行住ル及  
諸之禁中(博)ト云々。經絡ニ通リシ外ニ營  
肉スルノ名トス。其實ハ心血氣ニシテ其本ハ  
肝血皆從ノ云。

故令心絲在膈上也。

心絲氣血ヲ成ハ其本心腎氣根サス。元  
氣ナリ。是ヲ得男ニ據テ心絲ニ氣血ヲナス  
又ハ心絲ハ氣血ヲ以テ外ニ營肉ス。故ニ作伏ニ  
シテ云々ニ成ニ居ラサシハ諸伏ヲ外ニ達シカクシ  
猶ソ天上ニ運ニシテ地外ニ包羅スル如シ

其本ハ腎肝ニ從血ヲ以テ深ク内ニ涵養ス。  
故ニ作陰ニシテ卑際ク居セサシハ諸脉ニ内  
ニ藏シカクシ猶地ノ下ニ固クシテ天内ニ根  
基ル如シ。可見諸伏諸表ハ心ニ心絲ニ求メ諸  
脉諸裡ハ心ニ肝腎ニ求ム。内外表裡脉伏  
上下ニテ外ニ求スレテ其本ニ於テ欠ル所  
ナキコトヲ學ぶ者思フべシ。

世ニ難曰。肝青象木。肺白象金。肝持水  
而沈。木持水而浮。肺持水而沈。其言何也。

人身五藏之始皆在中間五行之氣人身  
之來通して其位ヲ示ス造化ニ有テ木トイフ  
者人身ニ各テ肝ト爲シ造化ニ有テ金トイ  
フモノ又身ニ各テ肺トイフ各異トイハレ其氣  
性ハ實ニ造化ト一ニシテニマラス故ニ肝ノ色青  
ハ造化ノ木ヲ生ル氣ト通肺ノ色白モ造化ノ金  
ヲ生ル氣ト通ス心在背里脾在右其五行  
ニ各象ス然レモシカモ造化ノ木ハ水ヲ以テ  
浮レ之ヲ藏象ノ肝ハ實ニ腎水トイフニ配  
レテ肺ノ浮ニ對シハ肝ト云ト腎位ニ近シ水

積ヲ爲テ下位ス其反ル所以ノ者ヲ向フ  
其水枯レトキハ浮テ雲トナル肺モ又シカリ  
造化ノ金ハ水ヲ以テ生スハ沈降トシテ藏象ノ  
肺ハ實ニ肝ノ沈ニ對シハ心位ノ火ニ近シテ心神  
ヲ爲テ上位ス其神ヲ方應スルハ下ニ陷テ  
陰火トナル故ニ肝ハ水ヲ補テ氣蓄ヲ引ノ  
法アリ肺ハ考テ多收ヲ以テ心脾ヲ補  
テ元氣ヲ升提法アリ此向雜毒矣ニ  
考ル所ナクシテ穿鑿ニ似テシカモ實ニ  
万世治術ノ要鑑ナリ此奉ヲ法履モ人此

深意アらんヲ不知シテ以テ一ノ理窟ヲめ  
ス故ニ治法眞勝し予カ其業命ヲ  
ノ藏ヲ補テ以テ始ニ存ヲ保テ以テ遂ニ始  
トイフモノハニテ此難ニ於テ其難ニ在リ也  
然肝者水ノ純木也

肝胆トモニ造化ノ氣ニ感應シテ人身ニ名  
稱ヲ得トイハレ肝ハ木ノ陰ニシテ如シ  
胆ハ木ノ所ニシテ夫男如シ陰ニシテ婦如シ  
ナスモノハ其作ヨハクシテ常ニ不足ス故ニ  
其剛ニシテ柔ニシテ身ヲ立ツ

獨立ヲ得ナルモ也肝ノ剛ニシテ有余則見  
モノハ金ノ味ナリ其質木ナリトイハレ肝  
ハ常ニ金ノ氣ヲ待テ動靜ス其色カ靑ハ水  
ノ氣ヲ常ニ信信ニ就テ金水ノ和ヲ好テ以テ  
肝ハ巳カ木ノ氣ノ象ヲ括テ金ニ比フ故ニ純木  
ニ比ナリ也胆モ亦其質木ノ所ニシテ夫  
道トナス之ニ其作フヨクシテ常ニ有余ス  
故ニ其柔ニシテ不足モノヲ懷テ身ヲ安ク  
胆ノ柔ニシテ不足ヲ見ルモノハ土ノ味ナリ  
故ニ其質木トイフニシテ胆ハ常ニ木ノ氣ヲ

行つ以テ見六肝ハ雜木ニシテ純木ニ非

ル也

乙角也庚之柔大言陰を陽に言夫を婦

角ト木ニ出ルノ柔ナリ其角ニ所賦アリテ

大角少角トイヘ又甲角乙角トイヘ其胆ハ

坎木ニシテ太角甲角ナレバ肝ハ陰木ニシテ

少角乙角ナリ庚辛ハ金ノ神ナリ人其金

所神トイヘ庚頼テ夫ト為ス是ヲ庚ノ柔ナ

リトイヘ庚ハ金ノ所神ナリ以テ也此系象

陰陽アリ也乾ニカカリ肝ハ乙木

壬

庚ノ柔也心ハ下火也壬ノ柔得ハ巳土ナリ

甲ノ柔也肺ハ辛金丙ノ柔也腎ハ癸水也

戊土ノ柔也胆ハ甲木脾夫心腸ハ丙火肺ノ

夫胃ハ戊土腎夫大腸ハ庚金肝夫膀胱

ハ酉水ナリ心夫其干ハ婦トイテ用ヲ

ナシ其支ハ夫ヲ頼テ身ヲ立ツ大言トハ

天地ヲ以テ言スハ陰木坎木トイヘ人

身ヲ以テ言スハ夫木好木トイフカ如シ

以テ扱フニ花好ハ常ニ其夫ノツヨキ

ヲ以テ言フニ虚ス治ヲ施スモノ花ヲ陰ニ



至テハ其氣衰又達シテ其虛ヲ補フニ府  
有ハ常ニ其好ノヨリキニホユフテ送シ実ス  
治ヲ為モノ其府ヲ抑テ其実ヲ厚シ故ニ  
肝有ニ井穴ニ取ルハ井水ト為テ肝氣ヲ  
升達シ胆有ニ井穴ニ取ルハ井金ト為テ胆  
氣ヲ折ス可見肝ヲ下リテ其庚金ヲ抑テ  
其好木ヲ養シ胆ニハ其金ヲ抑テ木ヲ折  
ク五俞道ヲニ旺胎ス  
釋曰陰陽而吸カ陰陽ノ氣其意樂金  
又行陰道多故令肝少而沈

肝木ハ坎ノ始ニテ春ニ旺ス其象坎ノ稚ナリ  
故微坎トイフ肝ツノ金水ヲ受テ金ノ妻ナリ  
シ又テ巳カ木氣ノ微坎ヲ解散シテ其金  
氣秋ニ旺シテ冰ノ稚ナル金氣ノ微陰ニ附ク  
是人倫ノ夫家ヲ婚テ巳カ家ヲ送ルカ如  
シ是ヲ其意樂金トイフ也又行陰道多  
トハ肝ハ血ヲ藏シ前陰ヲ循ル月経ヲ  
主リ其行下ニ向フコト多シ故ニ其夫ノ水  
ヲ稟ニ隨テ其伴木ニシテ乃水多沈ナリ  
若シ不沈トキハ形伴ヲ保ナリ或產後

藝者未人死先テ強弱月ヲ曠シ念  
怒聖學大藝面善會勳力雄壯十九ノ類  
ハ木其水精ヲ失テ下ニ沈テサル候ナリ  
治ツノ水ヲ履シテ木ヲ沈テシム  
肺者水ノ純金也

肺大腸トモニ造化ノ金氣ニ感應シテ人身  
ニ名稱ヲ付トイフ凡肺ハ金ノ所ニシテ婦人  
ノ如シ大腸ハ金ノ所ニシテ夫男ノ如シ陰ニ  
シテ陽道ヲ行フモノ其体ヨハクシテ柔  
ニ不足ス故ニ其剛ニシテ柔ルモノニ就テ身

ヲ立ラシ得サル也肺ノ剛ニシテ有余  
ヲ見ルモノハ火ノ所ナリ其質金ナリトイフ  
凡肺ハ柔ニ火ノ氣ヲ行テ動靜ス其巴カ  
賴所ノ火氣柔ニ伏位ニ就テ火土ノ和ヲ  
好シ以テ肺ハ巴カノ氣ノ象ヲ捨テ火ニ  
フ故ニ水純金也トイフ也大腸モ亦シカリ  
其体金ノ所ニシテ夫道ナルニ自々屈シ  
テ柔ニ有ラス故ニ其柔ニシテ不足ノモノ  
ヲ壞テ身ヲ安ス大腸ノメニ不足ヲ千  
シ柔ヲ事ナス凡者ハ前文ノ木ノ陰ナリ

故ニ大膳ハ帝ニ奉ルヲ行フ以テ見ルハ  
雜金ニシテ人化令ニ成ルナリ  
辛商也丙之柔大言陰を陽也言夫  
之歸

商トハ金ニ出ル者ナリ。其商陰成アリ  
大膳ハ成金ニシテ庚商辛商トイフ其  
陰ニシテ女商辛商ナリ。丙トハ火神  
ナリ。其火成神。丙ノ賴テ夫トナス是  
シ丙ノ柔トイフ是シ丙ハ火成神ナリ

于也此花象ノ陰成アリハ五花ノ名ニナ  
シカリ。前章ニ詳ナリ。其干ハ婦ト  
求メ其支ハ夫トホム。其支ハ夫ノ賴テ身  
シタフ大言トハ天地ヲ以テタトイフ也  
陰金成金トイフ人ノ身ヲ以テ言スハ夫金  
婦金トイフカ如シ。以テ其支ハ夫トホム  
其夫ノ陰ヲ思フニ其方ニ處シ。陰成モトク  
其方ニ急ヲ助テ其處ヲ補フニ存ある者ニ  
其好ノヨキ年ニホエツテ免レ。其夫ニ  
て父其存ヲ抑テ其家ヲ保フ。其夫

釋其處位の能く就火其の象樂火  
又行伏道多故令肺得水之存也  
金之脉始ニシテ秋ニ旺ス其多陰之雅  
ナリ故ニ陰陰トイフ肺ノ火伏ヲ受テ  
火ノ妻トナルヲ以テ巳カ令氣の陰陰トステ  
解氣ニシテ其火氣甚ニ旺シテ伏火ニ就  
ク是シ人偏ノ夫ノ家ヲ曉テ巳カ家ヲ遣  
ル如シ是ヲ曉ル就火ト云々樂火トイフ也  
是ニ曉ト云モ人陰陰ニシテ大伏ニ亦以  
ナリ又行伏道多トハ肺ノ氣ノ主テ上

ニ在リ唯就テ循リ平日ヨリノ好尿ヲ  
陰陰ニシテ胸背ニ布キ其音出シ其行  
上ノ行ニ多シ故ツ夫ノ土ヲ象フニ  
直テ其体一金ナシ凡水ヲ見テ名伏ニシテ上  
ニ存ナリ人若シ之存トキハ形存危シ  
外感初起の時ニ四支倦怠煩肌重日漸  
羸弱ニ奔散既角氣ヲシテ喘ニ凡ニニ  
之任初起ニシテ氣體輕也多陰陰ノ外体  
重多相ニテ是ナリ 医家皆之ナキ人  
殺人ナリ治ツ火土ヲ補テ其肺ヲ升レ

肺熱而復沈

憂成憂者、夫婦婚、物之初成、憂、  
物ノ初生、凡物ソノ初生ハ自他ノ氣雜リ  
他ニ是テ其制ヲ受テ成憂スルトキハ本性  
アラワレテ已カ意ニ從テ、猶人ノ親、  
ルトキハ慎謹ナル者モ父ニテ姑トナルトキハ  
慳貪ナルニ同シ、太病又ハ人老衰ヲ憂トス  
其時心神衰竭スルハ心血枯シ肺ニ夫トナルノ  
權ヲトロウルトキハ、辛ノ金陰ハ庚ノ金次ニ  
必ニテ其本性ニ常ス、故ニ常ニ氣力ナク動

作浪辛、健忘遺失、晝寢テ夜ナク、言語失  
誤、命令鄭重、皮膚凍梨、目眩重聽ノ類ヲ  
見ス

肝熱而復浮者何也

憂成憂者、夫婦婚、物之初成、憂、  
憂ハ其初ニ在リ、初ハ人ノ制ヲ受テ不能  
終ハ已カ意ニ從テ自肆ナリ、猶人ノ新、  
スルモノヨク謹テ其姑、舅トナルモノ放肆  
ナルニ同シ、人モ火、為スハ老弱、至テ金、水  
枯、枯スルハ肺、金、肝ニ夫トナルノ權ヲ失フニ

雷火胆木ノ外流テ自ラ存上ス故髪髮  
矣白牙連服唇ノ候候出手戦上重下隆  
志之ニシテ聲<sup>進</sup>進<sup>退</sup>退ノ象是ナリ  
故知辛當歸庚乙當歸甲也

辛ハ金ノ所ニシテ丙火ト寓ス今丙火其  
權ヲ失テ辛一金具坎金ノ庚ニ悔ス候  
高崩シテ呂氏ノ權ヲ執ルシテ呂モ亦  
亡ルカ如シ乙乙夕陰木ニシテ庚金ニ寓シ  
其金權ヲ失テ坎木ノ甲ニ悔ス自肆シテ  
制チキトキハ保全ナラス

世四雅曰五感各有声色臭味皆可曉知  
以不 声色臭味ノイハハ蓋シ古ノ医家  
考<sup>漢</sup>漢ノ事ナリ此ニ候ノ字ナキハ缺ルニ  
非シテ損之ナリノ色臭味声ト次セシテ声  
色臭味ト次ル者ハ其成語タルコト可知ナリ  
抑<sup>シ</sup>物ヲ察シ情ヲ知ルモノハ声色臭味辰  
ノ外ニ何求ナシ医ノ為テ諺ルヲ南南切ノ  
法三十声色臭味辰ノ脉象ヲ察スルニ過カ  
ルヤ色トハ各感ノ血氣ノ温潤生榮ヲ知  
ルナリノ各感ノ春ノ象ニシテ肝ニ係ル所ナ

リ其五色化其過不及榮枯ヲ為之以其其  
生氣ノ虛實ヲ知ル十リ人ノ臭トハ各藏血氣  
長盛南ノ大ノ勢ヲ知ルモノニシテ其ノ象ニシ  
テ心ニ係ル所ナリ人ノ其五臭其善惡皆其藏其  
ヲ以其長氣ノ虛實ヲ知ル十リ人ノ味トハ各藏  
血氣ノ化成温和ヲ察ス又四季ノ象ニシテ  
脾ニ子ル所ナリ人ノ其五味ト變所ナリ其好  
惡美惡之以其化成ノ氣ノ虛實ヲ知ル十リ人  
声トハ各藏血氣ノ收固シテ出ル勢收歛  
嚴肅ノ象ヲ察ルモノニシテ肺ニ子ル所ナリ也

其五音ト變シ傳流以其虛實  
ヲ知ル十リ人ノ液トハ各藏血氣ノ内藏ヲ  
リレテ出ル其多濃薄ト其液化ル所ヲ以テ  
テ知ス之十リ人ノ脉モ亦然各藏血氣ノ榮生  
ヲ其脈ヲ出シ六部ニ變ルモノノ象ニシテ以テ  
知ル其虛之更十リ人ノ各藏血氣ノ盛衰ヲ以テ供  
各藏化氣ヲ以テ傳各藏血氣ノ收氣ヲ以テ傳  
各藏藏氣ヲ以テ沈之十リ声色身味ト  
血氣ノ生長化收之ヲ見テ禁枯明逆ヲ  
察スモノ也和漢古今ノ医ヲ以テ二意ヲ

不用一大欠連ニ脈や四十九難ニ言トコ  
 口五臟病ニ於テ肺ハ五声ヲ主リ肝ハ  
 五色ヲ主リ心ハ五臭ヲ主リ脾ハ五味ヲ主  
 リ腎ハ五液ヲ主リ總合シテ言フ此篇  
 ハ五臓ノ各為ニ配分シテ交錯シテ言フ  
 故治ヲ十ニ至テ異レ所アリ又一臟獨有  
 或ハ二三臟並有各ノ其主レ所ノ五物  
 ニヨリテ為何ノ為ヨリ傳テ生レ知リテ  
 其為ヲ治ノ意旨ヲ明カニスル也  
 十寔又言

十變トハ十數ヲ以テ錯綜シテ變化ノ道ヲ  
 示ス十難如ハ脈ヲ以テ十變ス十トハ五為  
 五府合シテ十トハ心此十ノモノ五臟ニ錯綜  
 シテ五十變トハ心ヲ心脾ヲ心肝ヲ心  
 腎ヲ心ヲ獨ヲ心腸胃ヲ心脾大腸胃ヲ  
 心腸胆ヲ心脾腎胃ヲ心腸胃是易ノ大衍  
 ノ數ニシテ亦方化ヲ知リクハスニ是レモ也  
 古經此旨ヲ論ル書アリテ十變トイフ下  
 脈ナリハ五數ヲ衍テ十變シテ示スナリ  
 肝色青其臭臊其味酸其声呼其液汗



合補

合補

經補

經補

命補

命補

榮補

榮補

心榮補

心榮補

赤ハ血氣の其色也。赤ハ未達ル所アルノ色

春木ノ象也。赤ハ綠色アリ。毛工キトス肝氣

ノ色ナリ。血虚也。井ハ達ス。藍色アリ。甜味

アリ。ハナイ口ト云胆府ノ色也。血実也。井

ハ厚ス。腫モ血氣發生シテ又クツカユル所ア

リ。テ出ル臭ナリ。春ノ象自嗅アリ。惡ハ

胆府也。驚ル虚也。他臭ニテ自不惡ハ肝藏也。

酸モ血氣發生シテ又ク閉ル所アリ。テ出ル味ナリ。春木ノ象自好ハ肝也。

芳復也。惡ハ胆府ナリ。食滯也。

呼モ血氣發生シテ未達所アルニ出ル。春木

ノ声ナリ。有力ハ氣実ナリ。胆府也。有力ハ

肝氣ナリ。氣虚也。泣ハ血氣發生シテ抑

鬱ル所アリ。テ出ル。怒ニ泣ルハ陰

虚也。胆ナリ。喜ニ泣ルハ肝也。陰ノ美也。

七疢ノ十變也。

心色赤其臭焦其味苦其声言其後汗

赤ハ血氣用散シテ不達トイフ所ナク不復

ノ色。夏火ノ象。熱也。内ハ心氣ノ色。虚也。

濃紅ハ少腸ノ象也。實也。在ハ血氣

心井

心腸井

心合

心言

心経

心経

心命

心命

心命

用敵して不収ノ覺度火ノ化にして換也自南  
 于惡ハ氣運也也心腸也他身ハ自身也ハ  
 虚勢ノ故也心也苦ハ氣烈久味多也  
 火燒ニヨリテ生ル味ナリ其火ノ象自  
 好ハ心氣也後也惡ハ心腸府傳言也言ハ  
 血氣通暢ノ声其火ノ象也寒海訥單ハ心  
 藏ナリノ虚也其傲放言ハ心腸府実ナリ  
 汗ハ血氣換散ノ後其火ノ象也作ニシテ汗ハ  
 心也虚也作其熱汗ハ心腸ノ十變也實也  
 脾色其其臭其味甘其声歌其辰延

脾

脾

心井

心腸井

脾井補

脾井

脾合

黄ハ血氣渾和にして不独立ノ色土ノ象也  
 毒臭ハ其味ハ脾ノ色血氣ノ衰也濃黄ハ胃  
 血氣渾和ス実熱也香ハ血氣七和悦ニシ  
 テ惡臭ヲ化ス土ノ象ナリ自好ハ脾氣  
 ノ虚也惡ハ心腸ノ其味実ナリ好ハ  
 ニ多香氣ヲイハリ甘ハ血氣渾和スル  
 味ニシテ烈氣ヲ和ル味ナリ土ノ象也  
 自好ハ脾氣其味ナリ惡ハ胃氣傳  
 際ナリ歌ハ脾氣其味ナリ其形  
 シテイフ土ノ象ナリ其力ハ脾氣ノ

胃合  
得  
補  
男  
得

虚ナリ有カ  
延ハ  
宿テ  
出ル

十度也

肺色白其臭腥  
後保  
白ハ

脈長  
大腸  
肺  
補

血氣收縮  
腥ハ血氣縮テ陰

大腸  
肺  
大腸

象自嗅  
肺ノ虚

辛ハ  
象也  
停滯也

肺  
大腸

哭ハ  
每カハ

肺合  
大腸合

涕ハ  
肺ノ

十度也

腎色里ノ身ノ味鹹ノ声呻ノ味  
後也

腎台補

腎ノ口ノ味

腎ノ舌ノ味

腎ノ心ノ味

腎ノ肝ノ味

腎ノ脾ノ味

里陰氣閉テ血氣藏ノ色淡也里ハ世積  
ノ虚也里虚ノ如キハ膀胱ノ清実ナリ  
腎ハ陰氣閉テ血氣敗壞スルノ身自莫  
膀胱ノ清実他身ハ腎元ノ虚熱ナリ  
鹹ハ陰閉血氣ノ降ノ味ナリ人自好ハ骨ノ  
勞ナリ人喜ハ膀胱ノ合傳ナリ  
呻陰氣閉テ血氣閉ノ氣ナリ人喜カハ腎

膀胱

腎井

膀胱

ノ氣虚ナリ人喜カハ膀胱ノ氣傳ナリ  
重陰積テ血氣フカレ後ナリ人散  
味ハ腎元ノ虚熱ナリ人喜カハ膀胱ノ清  
共ニ十度也

是五者声色身味也

形ノんモノハ声色身味アリト其性ヲ  
知ル花者ノ性情以テ知ル古人考ク  
聞テ移声アリト知リ春秋ヲ嗅テ血腥氣  
アリト知リ場ヲ嗅テ之如ク氣アリト知ル  
顔補裏ノ百多千ノ家ハ此ニ出テ人死夫

子ノ視觀察此此所ニ不外モ也也其  
各ノ此五物ノ具ニヨリテスクニ用テ  
法トナス

其有七神各何所統耶

其有七神各何所統耶  
其有七神各何所統耶

然レトモ之ナ形トナリニ在ニ其用大ナリト  
氏其用ヲ示シカクシ天也人身ニ其

至宝タル者ハ神ニ以テ總之故ニ

易ニ告花ノ用ヲ呼テ天也神道トイフ

人モ声色身味脈ノ以テ血氣ノ長短知

之ニ遁ル所ナレトモ其血氣ニ神アリテ

未タ血氣ヲラフシナル已前ニ是ニ衰壯

ヲナスモノナリ也言ニキハ神トイハ

カテイトキハ魂魄神意智精志ト

イフ之ナ無声ノ身色ニ神ニ在液ニ

シ人シカモ用事タルモノナリ也神

七シテ各ノ何ノ所ニ在ルニ向ス

然レモ人ノ神氣所寄也

是レモ字ヲ稱シテ其氣ノ名ナリハ

此神氣ノ名ナリハ其氣ノ名ナリハ

此神氣ノ名ナリハ其氣ノ名ナリハ

此神氣ノ名ナリハ其氣ノ名ナリハ

一、必是之形、神、元、之、天、地、ト  
 一、三、生、ト、七、世、神、ト、之、う、け、し、ハ、天、地、ト  
 ハ、十、し、テ、死、ト、イ、フ、神、ト、あ、し、テ、万、殊、ト、  
 リ、万、殊、ニ、し、テ、下、十、ル、出、度、多、化、し、テ、天、地、  
 ト、十、ル、モ、ハ、九、ニ、是、し、ノ、也、故、ニ、九、ノ、精、  
 以、ハ、し、テ、全、ク、お、ス、ル、ニ、ヨ、リ、テ、也、  
 故、肝、花、魂、肺、花、魄、心、花、神、脾、花、志、  
 腎、花、精、志、也、  
 此、七、神、根、が、九、者、之、後、十、ノ、七、也、  
 一、點、ノ、灵、ニ、し、テ、移、遷、固、ニ、し、テ、七、神、生、ス、  
 七、神、ニ、移、キ、ト、キ、ハ、又、シ、キ、不、能、十、リ、  
 ト、八、木、石、ノ、精、是、也、  
 下、イ、ウ、動、ニ、シ、テ、人、身、ニ、基、中、ス、ル、モ、十、リ、  
 世、移、固、ニ、シ、テ、其、後、自、去、ル、十、ル、モ、十、リ、  
 ト、イ、フ、故、ニ、移、ハ、信、也、  
 月、ノ、信、中、ニ、決、メ、来、渡、ス、ル、カ、也、  
 志、ヲ、立、テ、志、ヲ、生、ス、ト、ハ、靈、氣、ヲ、サ、シ、ユ、ク、  
 至、リ、ニ、神、ノ、德、智、ヲ、十、ル、人、志、ヲ、立、テ、  
 至、リ、賢、女、十、ル、石、ト、十、ル、仙、ト、十、ル、  
 志、ニ、ヨ、リ、テ、精、氣、ヲ、也、  
 故、ニ、

一、點、ノ、灵、ニ、し、テ、移、遷、固、ニ、し、テ、七、神、生、ス、  
 七、神、ニ、移、キ、ト、キ、ハ、又、シ、キ、不、能、十、リ、  
 ト、八、木、石、ノ、精、是、也、  
 下、イ、ウ、動、ニ、シ、テ、人、身、ニ、基、中、ス、ル、モ、十、リ、  
 世、移、固、ニ、シ、テ、其、後、自、去、ル、十、ル、モ、十、リ、  
 ト、イ、フ、故、ニ、移、ハ、信、也、  
 月、ノ、信、中、ニ、決、メ、来、渡、ス、ル、カ、也、  
 志、ヲ、立、テ、志、ヲ、生、ス、ト、ハ、靈、氣、ヲ、サ、シ、ユ、ク、  
 至、リ、ニ、神、ノ、德、智、ヲ、十、ル、人、志、ヲ、立、テ、  
 至、リ、賢、女、十、ル、石、ト、十、ル、仙、ト、十、ル、  
 志、ニ、ヨ、リ、テ、精、氣、ヲ、也、  
 故、ニ、

腎ニ於テ此ニ主ルヤ其後ノ主ル也  
達ニレテ不働ニ用ヲ為ス神トス口ニ  
主ル其神從テ知覺ニ主動思惟七情ノ  
主トスモ出テ外ニ動ノ神ハ魂ノ用也  
耳聽鼻嗅口舌目視舌伸手握足  
踏動靜言海目旋止氣前後陰ノ用  
形体ニ主ツテ神ノ用ヲナスモハ魂也  
正シク魂ハ身動ヲ主ツテ伏ナルヲ以テ肝ニ  
居ル形体ノ交相ヲ以テ魄ヲ信トシ肺ニ  
居ルトスニテ神ノ使令ナリトカレト

視魄相因テ用ヲナシ相離ルコトナレ  
人サメテ耳目手足ハ身ノ主ル耳目ヨ  
リレテ情ウコクモ魄ヲ魂ニ付ルヤイ  
子テ耳目視聽セスレテ受クニテ叫聲  
スルハ魄ヲ魂ニ付ル色ヲ見ニ情ヲ起  
リ宝ヲ見テ盜ヲ欲スハ是痛ニ白ラテ  
情ルモハ魄ヲ魂ニユクヤ怒ルニヨリテ  
天年ヲ失フ悲ニヨリテ泣ク出スハ魄ヲ  
魂ニ付ルナリ情ヲ起シテ節ヲ折ル  
怒レテ走ル氣ハ心ヲ魂ヲ行

ナリ。精神魂魄ハ志ニヨリテ動キ其動  
ノ善惡ハ先利害吉凶ヲ審ンハ智トイフ  
善惡ハ先利害念起ク恒ニスル所アルヲ  
意トイフ。精神魂魄ノ神魂魄ノ  
本根ナリ。意智ハ神魂魄ノ子ナリ。テ  
後ニ其ノ弁止スルモノ、善惡ヲ念トス  
ルヲ意トイハ、其念ニテ裁断スルヲ智  
トイフ。腎水元ニシテ決シハ心ニ神ア  
ル所以ナリ。土ハ收テ生スニ氣ナリ。  
故ニ二神シテ其意ノて此ニテ智ヲ

暗クストキハ畏ナリ。意ヲ降ニシテ智ヲ  
明ニスルモノハ智ナリ。大智ニ降ニシテ智  
知教ル見ワケシ。志ヲ精ニシテ精ヲ免  
スモノハ事成ル。志ヲ妄想シテ精ヲ竭  
スモノハ功ナラズ。神ヲ靜ニスルハ魂魄アル  
情ト視能ニ從テ神ヲ善ムモノハ神  
ヲトクフ。賢者事ニ情ト視能ト意ト  
志トヲ制シテ神ト智ト精トヲ養フハ  
神明事ニ成ナリ。



已亥十月十九日夜校畢

Vertical columns of handwritten text in a traditional Chinese style, contained within a blue-lined border. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side of the page.

